

42590

教科書文庫

4
810
51-1926
20003 02257

Kodak Gray Scale

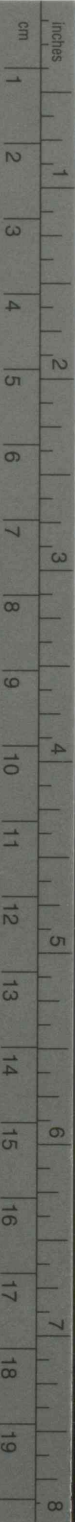
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

編平彌田吉  
**文國範師**  
 甲部一第  
 七卷

教  
5  
20





資

教科書文庫  
4  
810  
51-1926  
2000302257

375.9  
Y019



文部省檢定濟  
大正十五年三月十七日 師範學校國語教科用科

吉田彌平編

師範國文  
第一部用

卷七

東京 光風館藏版

広島大学図書

2000302257







師範國文 第一部用 卷七

目次

一	高瀬舟	……	森林太郎	一
二	觀潮樓	……	永井荷風	四
三	文藝の飛躍	……	厨川白村	三
四	光頼卿の参内	……	〔平治物語〕	天
五	待賢門の戦	……	〔平治物語〕	天
六	軍記物語	……	芳賀矢一	四
七	大原御幸	……	〔平家物語〕	毛
八	承久の役	……	〔増鏡〕	四

目次



九	七寶の柱	泉鏡花	三五
一〇	奥の細道	松尾芭蕉	全
一一	藤の花	荻原井泉水	六
一二	芭蕉と一茶	野口米次郎	九
一三	雨	生田春月	二七
一四	廬山烟雨	井原西鶴	二二
一五	借家大將	近松門左衛門	二七
一六	千里が竹	佐々醒雪	三七
一七	西鶴と近松	横井也有一	三五
一八	百蟲譜	室鳩巢	三九
一九	月は世々の形見	百田宗治	一五
二〇	バベルの塔		

二一	謙遜の心	阿部次郎	一五
二二	否定と肯定と	安倍能成	一五





高瀬舟 京都の高瀬川を上下する舟で徳川時代に遠島を申し渡された京都の罪人を大阪に廻すに用ひられた

森林太郎 號は鴨外 陸軍々醫總監 東京帝室博物館長

醫學博士 文學博士 大正十一年薨年六十一

# 師範國文 第一部用 卷七

## 一 高瀬舟

森 林太郎

何時の頃であつたか。多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃で、もあつたゞらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にも只一人で乗つた。



喜助  
 剃刀で喉を切つた病身の弟を苦痛から救はうとして過つて其の命を絶つたのであつた  
 知恩院  
 京都東山の麓にある淨土宗の大寺

護送を命ぜられて、一緒に舟に乗込んだ同心羽田庄兵衛は、唯喜助が弟殺しの罪人だといふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて来る間、その瘦肉の色、蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆はぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、温順を装つて、權勢に媚びる態度ではない。庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乗つてからも、單に役目の表で見張つて居るばかりでなく、絶えず喜助の舉動に、細かい注意をしてゐた。

其の日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪廓を霞ませ、やう／＼近寄つて来る夏の温さが、兩岸の土からも、

川床の土からも、霧になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる水の囁きを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙つてゐる。其の額は晴やかで、目には微かな輝きがある。庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だと、心の中で繰りかへしてゐる。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しさうで、若し役人に對する氣兼ねなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。



庄兵衛は心の中に思つた。これまで此の高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それに此の男はどうしたのだらう。遊山船にでも乗つたやうな顔をしてゐる。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いや、それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や舉動がない。此の男はどうしたのだらう。庄兵衛がためには、喜助の態度が考へれば考へる程分らなくなるのである。

暫くして、庄兵衛は怵へ切れなくなつて呼掛けた。

「喜助。お前は何を思つてゐるのか。」

「はい。」

といつてあたりを見廻した喜助は、何事をお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衛の氣色を窺つた。

庄兵衛は自分が突然間を發した動機を明して、役目を離れた應對を求める分疏をしなくてはならぬやうに感じた。そこでかういつた。

「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、己は先刻からお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは随分色々な身の上の人だつたが、どれも、島へ往くのをかなしがつて、見送りに來て、一緒に舟に乗る親類の者と、夜通し泣くに極つてゐた。それにお前の様子を見れば、どうも島へ往くのを



苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだ  
い。

喜助はにっこり笑つた。

「御親切におつしやつて下さつて、有難うございます。なる程  
島へ往くといふことは、外の人には悲しい事でございませう。  
其の心持は私にも思ひ遣つて見る事が出来ます。併しそれ  
は世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構  
な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私の致  
して参つたやうな苦みは、何處へ参つても無からうと存じま  
す。お上のお慈悲で命を助けて島へ遣つて下さいます。島  
はよしやつらい處でも、鬼の栖む處ではございますまい。私  
はこれまで、何處といつて自分の居て好い處といふものがご

ざいませんでした。今度お上で島に居ろとおつしやつて下  
さいます。其の居ろとおつしやる處に落着いてゐることが  
出来ますのが、先づ何よりも有難い事でございます。それに  
私はこんなにかよわい體ではございますが、ついで病氣を致  
したことはございせんから、島へ往つてから、どんなつらい  
仕事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じま  
す。それから今度島へお遣はし下さるに就きまして、二百文  
の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。」  
かう言掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰付けられるも  
のには、鳥目二百銅を遣はすと云ふのが、當時の掟であつた。  
喜助は語を續けた。

「お恥かしい事を申し上げなくてはなりません。私は今日ま



で二百文と云ふお足を、かうして懐に入れて持つてゐたことはございませぬ。何處かで仕事に取りつきたいと思つて、仕事を尋ねて歩きました。それが見つかり次第、骨を惜まらずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それも現金で物を買つて食べられる時は私の工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、また後を借りたのでございます。それがお牢に這入つてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。私はそればかりでも、お上に對して濟まない事を致してゐるやうでなりません。それにお牢を出る時に、此の二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此の二百文は私が使はず持つてゐることが出来ます。お

足を自分のものにして持つてゐると云ふことは、私に取つては、これが始めてございます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出来るかわかりませんが、私は此の二百文を島でする仕事の資本もとにしようと思つてをります。

かういつて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衛は「うん、さうかい。」とはいつたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も言ふことが出来ずに、考へ込んで黙つてゐた。庄兵衛は彼此、初老に手の届く年になつてゐても、もう子供も四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮してゐる。平生人には吝嗇と謂はれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るもの、外、寢巻しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎



へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立て、行かうとする善意はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が満足する程手元を引締めて暮して行くことが出来ない。動もすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が内證で里から金を持つて來て帳尻を合せる。それは夫が借財といふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さういふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は、五節供だといつては里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だといつては里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を填めて貰つたのに氣が附いては、好い顔はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、是が原因である。

庄兵衛は今喜助の話聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ手に渡して無くしてしまふといつた。いかにも哀な、氣の毒な境界である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はゞ十露盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有難がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちは無いのである。さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持はこつちから祭して遣ることが出来る。しかし如何に桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐる



ることである。

喜助は世間で仕事を見附けるのに苦しんだ。それを見附けさへすれば、骨を惜まずに働いて、やうく口を餉することの出来るだけで満足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ満足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てゝ行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一杯の生活である。然るにそこに満足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらど

うしよう、大病にでもなつたらどうしようかと云ふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取出して來て穴填をしたことなどが判ると、此の疑懼が意識の闕の上に頭を擡げて來るのである。一體此の懸隔はどうして生じて來るのだらう。只上邊だけを見て、それは喜助には身に係累が無いのに、こつちにはあるからだといつてしまへばそれまで、ある。併しそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうもない。この根柢はもつと深い所にあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は只漠然と、人の一生と云ふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此の病が無かつたらと思ふ。其の日くの食が無いと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる儲が



無いと、少しでも儲があつたらと思ふ。儲があつても、又其の儲がもつと多かつたらと思ふ。此の如く先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏止ることが出来るものやら分らない。それを今日の前で踏止つて見せてくれるのが此の喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。

庄兵衛は今更のやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此の時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。(鷗外全集)

永井荷風  
名は壯吉  
文學者

明治十二年東京  
生

二 觀潮樓

永井荷風

小石川春日町から柳町指ヶ谷町へかけての低地から、本郷の高

根津

本郷区の東北部  
の低地

東は上野谷中の  
高地

西は彌生ヶ岡千  
駄木の高地

彌生ヶ岡

本郷に續く高地  
第一高等學校な  
どのある處

千駄木

彌生ヶ岡の北に  
續く高地

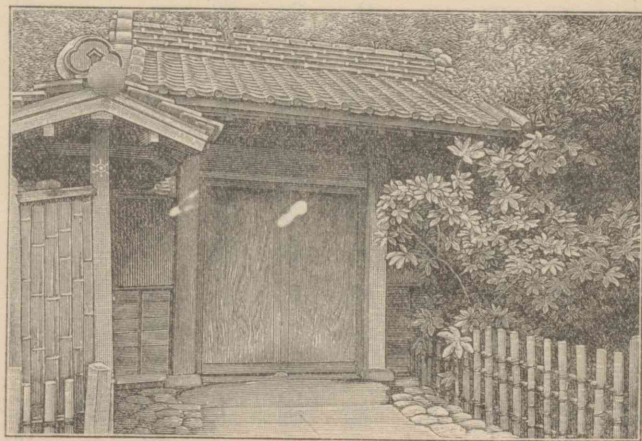
團子坂

千駄木から根津  
へ下りる坂

臺を見る處々には、電車の開通しない以前即ち東京市の地勢と風景とがまだ今日ほどに破壊されない頃には、樹や草の生ひ茂つた崖があらはれてゐた。根津の低地から彌生ヶ岡と千駄木の高地を揚げば此處も亦絶壁である。絶壁の頂に沿うて、根津権現の方から團子坂の上へと通ずる一條の路がある。私は東京中の往來の中でこの道ほど興味ある處はないと思つてゐる。片側は樹と竹藪に蔽はれて、晝猶暗く、片側はわが歩む道さへ崩れ落ちはせぬかと危ぶまれるばかり、足下を覗くと崖の中腹に生えた樹木の梢を透して谷底のやうな低い屋根が小さく見える。されば向ふは一面に遮るものゝない大空、隈もなく廣々として、自由に浮雲の定めない行方をも見極められる。左手には上野谷中に連なる森黒く、右手には東京の市街が一目に見晴さ



Verlaine  
(1844-1896)  
人佛國の詩  
ヱルレーヌ



れ、其處より起る雜然たる巷の物音が距離の爲に和げられて、か

のヴェルレーヌが詩に、  
かの平和なる物のひびきは街  
より來る……

森 といつたやうな心持を起させる。  
鳴 當代の碩學森鷗外先生のお邸は  
外 この道のあたり、團子坂の頂に出  
邸 ようとする處にある。二階の欄

干に佇むと、市中の屋根を越して  
遙かに海が見えるとやら。その  
故に先生はこゝを觀潮樓と名づ  
けられたのだと私は聞傳へてゐる。度々私はこの觀潮樓に於

て、親しく先生に見ゆる光榮に接してゐるが、多くは夜になつて  
からの事なので、惜しいかな、一度もまだ潮を觀るの機會がない  
のである。その代り私は忘れられぬ程音色の深い上野の鐘を  
聞いた事があつた。

日中はまだ残暑の去りやらぬ初秋の夕暮であつた。先生は大  
方食事でもあつたものか、私は取次の人に案内されたまゝ、暫  
くの間、唯一人此の觀潮樓の階上に取殘された。樓はたしか八  
疊に六疊の間かと、記憶してゐる。一間の床には何か謂れの有  
るらしい雷といふ一字を石摺にした大幅が掛けてあつて、其の  
下には古い支那の陶器と想像される大きな六角の花瓶が、花一  
輪挿してない爲に、却てこの上もなく嚴格に、又冷靜に見えた。  
座敷中には此の床の間の軸と花瓶の外は全く何一つ置いてな



柵草紙  
明治廿九年から  
鴨外が主宰して  
発行した批評創  
作翻譯をのせた  
文學雜誌

いのである。額も無ければ置物も無い。恐るゝ四枚立の襖の開放してある次の間を窺ふと、中央に机が一脚置いてあつたが、それさへ謂はば臺のやうなもので、一枚の板と四本の脚とがあるばかり、抽斗もなければ彫刻の飾も何もない机で、その上には硯もインキ壺も紙も筆も置いてはない。併しその後立に立てた六枚屏風の裾からは、紐で束ねた西洋の新聞か雑誌のやうなものゝ片端が見えたので、私はそつと首を延ばして差覗くと、いづれも大部のものと思はれる種々な洋書が、座敷の壁際に高く積重ねてあるらしい様子であつた。世間には往々讀まざる書物を殊更人の見る處に飾り立て、置く人さへあるのに、これは又何といふ一風變つた癩癖であらう。私は柵草紙以來の先生の文學とその性行について、何とはなく沈重に考へ始めようと

シヴァンヌ  
佛國の畫家  
Cavannes  
ジェネヴィエヴ  
巴里の守護  
神  
Genevieve  
パンテオン  
巴里の守護  
神  
Pantheon  
佛國の名士  
英雄を葬る  
處

した。恰もその時である。一際高く來る木犀の匂と共に、上野の鐘聲は残暑を拂ふ涼しい夕風に吹送られ、明放した觀潮樓上に唯一人、主人を待つ間の私を驚かしたのである。私は音のする方を眺めた。千駄木の崖上から見る彼の廣漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄に包まれ、一面に烟り渡つた底から、數知れぬ燈火を輝かし、雲の如き上野谷中の森の上には、淡い黄昏の微光をば夢のやうに残してゐた。シヴァンヌの描いた聖女ジェネヴィエヴが、靜かに巴里の夜景を見下してゐる彼のパンテオンの壁畫の神祕なる灰色の色彩が思ひ出された。鐘の音は長い餘韻の後を追掛け追掛け撞き出されるのである。その度毎に、其の響の湧出る森の影は暗くなり、低い市中の燈火は次第に光を増して來て、車馬の聲は嵐のやうに却て高く、やが



て鐘の音の最後の餘韻を消してしまつた。私は茫然として再びがらんとして何物も置いてない觀潮樓の内部を見廻した。さうして此の何物もない樓上から此の市中の燈火を見下し、此の鐘聲と此の車馬の響とをかはるがはるに聽澄ましながら、わが鷗外先生は靜かに書を讀み、又筆を執られるかと思ふと、實に此時ほど私は先生の風貌をば、シヴァンヌの壁畫中の人物同様、神祕に感じた事はなかつた。



(録メソヴァシ) ヴーエイヴネジ

ところが、やあ大變お待たせした。失敬々々」と云つて、先生は書生のやうな態度で、二階の梯子段を上つて來られたのである。金巾の白い襯衣一枚、その下には筋のはひつた軍服のズボンを書いて居られたので、何の事はない、鷗外先生は日曜貸間の二階か何かでごろ／＼してゐる兵隊さんのやうに見えた。「暑い時はこれに限る。一番涼しい。」と云ひながら、先生は女中の持運ぶ銀の皿を私の方に押出して、葉巻を薦められた。先生は陸軍省の醫務局長室で私に對談せられる時にも、きまつて葉巻を薦められる、それは此の葉巻だけ



森 林 太 郎



オイケン  
獨逸の現代  
哲學者  
Eucken  
(1846-)の  
新理想主義  
を唱ふ

であらう。  
此の夕、私は親しくオイケンの哲學に關する先生の感想を伺つて、夜も九時過、再び千駄木の崖道をば根津權現の方へ下り、不忍池の後を廻ると、こゝにも聳え立つ東照宮の裏手の一面の崖に、木の間の星を數へながら、聽て廣小路の電車に乗つた。(荷風全集)

厨川白村

名は辰夫  
英文學者  
京都帝國大學教  
授  
文學博士  
大正十二年卒  
年四十四

### 三 文藝の飛躍

厨川白村

文藝は生命力が絶對の自由を以て表現せられた唯一の場合だ。より高く、より大いなる、より深き生活に向つて躍進せんとする創造の欲求が、何等の抑壓拘束を受けずに表現せられてゐるために、そこにはいつも大きな未來が暗示せられてゐる。過去よ

心の冒險  
Spiritual  
adventure

り現在に續いてゐる生命の流が、文藝作品に於てのみは、他に見出すべからざる自由な飛躍を爲すことを得るが故に、人間の他の活動——それは皆周圍から色々の抑壓を受けてゐる——よりは、十歩も二十歩も前に突出して、所謂心の冒險スピリチュアルアドベンチャーをやることが出来るので。常識や物質や法則や因襲や、形式の拘束を超越して、そこには常に新しい世界が発見され創造される。いまだ政治上・經濟上・社會上の現象に現れて來ないものが、早く既に文藝上の作品のうちに暗示し啓示せられるのは全くこれがためである。

文藝上の天才は飛躍し突進する「心の冒險者」である。しかしながら一人の英雄の事業の背後には幾多の無名の英雄の努力があり、あると同じく、大藝術家の背後には其の「時代」があり、「社會」があり、



「思潮」があることをも否む譯には行かない。文藝は飽くまでも個性の表現であると共に、その個性の他の半面には普遍性をも伴つてゐる。普遍の生命が同時代或は同一社會、或は同一民族に屬する總ての人々に遍在するからには、詩人が自ら先驅者となつて表現したものが一代民心の歸趨を示し、時代精神の那邊にあるかを暗示すべきものたるは當然の結果である。かくしてより高き、より大なる生活の可能を暗示する點に於て、文藝家はペイターの言つた如く、「文化の先驅者」であらねばならぬ。一つの時代一つの社會には、その時代の生命があり、その社會の生命があつて、不斷の流動變化を續けてゐる。それがやがて思潮の流であり、時代精神の變遷である。これは時運の大勢に促されて、何處からともなく動き出る力だ。その初に當つては、殆

Peter  
(1839—1894)

ペイター  
英國の著  
述家

ど何等の纏まつた形もなければ體系をも具へてゐない、たゞ茫漠として捕捉すべからざる生命力そのものである。藝術家が表現するところのものはこの生命力そのものであつて、決して固定し凝固した思想でもなく、概念でもない。纏まつた主義などとは稱すべき性質のものでは勿論ないのである。いくら抑壓作用を加へても抑制し禁壓し得べからざる、往くべきところまで往かなければ已まない生命力そのもの、具象的表現が文藝作品である。一代の民衆の胸の奥には潛みながら、またその無意識心理のかけには隠れて居ながらも、たゞ不安焦燥のおもひに驅られつゝも、何人もこれを捕捉し表現し得ざるあるものを、藝術家はその特異の天才の力によつてこれに表現を與へ、夢の形に象徴化し得るのである。逸早くもこれを把握し表現し反



映したものが文藝作品である。既にそれが一つの體系ある思想とか觀念とかに纏め上げられて了へば、哲學となり學說となり、更にまたその思想や學說が實行の世界に實現せられる時には、政治運動、社會運動となつて、もう藝術の圈外に逸し去つてしまふ。かくの如き現象は過去の文藝史が屢、例證せる事實で、日本の例で見ても、頼山陽の純然たる文藝作品である「日本外史」といふ敘事詩が明治維新の先驅をなし、日露戰爭以後に起つた自然主義文學の運動が、早く既に最近のデモクラシー運動や、因襲打破社會改造の運動の先驅であつたことは疑ふべからざる文、明史的事實であつた。また文藝作品としては最も原始的で簡單な童謠、流行唄の類が民衆の自然の儘な聲として、能く時勢を穿ち大勢の暗遷黙移を暗示したことは、獨り外國の古代に於て

のみならず、日本の歴史上にも屢見られる現象であつた。古くは、日本紀に出てゐる童謠と云ふのは即ち純粹の民謠で、國民の禍福吉凶を豫言したものが多かつた。ずつと近代になつても、徳川の末年から明治の初年へかけての民族生活の動搖時代に於て、流行唄の類が如何に痛切なる時代生活の批評であり豫言であり警告であつたかは、今なほわれわれの記憶に新なるところではないか。

情熱、それは先づ民衆の胸の奥に萌す、これに表現を與ふるものが文藝である。いづくからともなく吹く風を絃にとらへて、いみじき妙音をかなで出でるエイオリアンライルのやうに、詩人は一代民心の動く機微を捉へて、これに藝術的表現を與ふるものである。目にはさやかに見えない民衆の無意識心理の内容

エイオリアンラ  
イ  
Eolian lyre  
目にはさやかに  
秋來ぬと目には  
さやかに見えぬ  
ども風の音にぞ  
驚かれぬる(古今集)



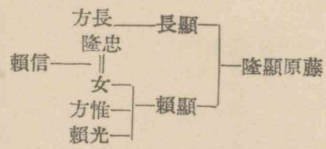
感性 Sensibility  
ベガサス  
天馬

光頼卿  
藤原頼朝の長子  
平安三年（一八一八）  
三月三十一日  
年五十九日  
世に桂大納言といふ  
十九日  
二條天皇平治元年（一一九一）  
二月  
信頼卿  
右衛門督藤原信頼  
父は忠隆  
母は藤原光頼の妹  
この年二十七で  
歿す

を、天才の鋭敏なる感性が逸早くもそれを擲んで表現するのである。  
因襲や常識などの立場から見れば、だから文藝作品は甚だしく飛びはなれた夢のやうなものとも見られる場合があらう。さういふ一切のものを超越した純一無雜なる創造生活の所産であるところに、文藝の本質があるのだ。ベガサスの如き天才の飛躍に大なる意義が見出されるのだ。（厨川白村集）

#### 四 光頼卿の参内

さる程に内裏には同じき十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不参



束帶 文官の正服  
冠袍石帶下襲表  
袴劍笏靴の沓  
時繪の太刀  
衛府の太刀  
儀式用の飾太刀  
腹巻 簡略な鎧  
上臈  
故参  
上位の者

にておはしましけるが、参内して承らんとて殊に鮮かに束帶引繕ひ時繪の細太刀おとしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に膚に腹巻着せ、雑色の装束にいでた、せ、自然の事もあらば、人手に懸くな、汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。とて御身近く置き、その外、清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて處々門々を堅く守護しけるを事もせず、さき高らかに追はせて入りたまへば、兵ども大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。  
紫宸殿を経て、殿上をまはりて見たまへば、信頼卿一座して、その座の上臈たち皆下にぞ着かれける。光頼卿、こは不思議のことかな。人はいかにふるまふとも、彼は右衛門督、我は左衛門督なれば、下には着くまじきものを、と思はれければ、左大辨宰相長方



宰相  
參議の唐名  
定員八人  
長方卿  
藤原長方  
光頼の從弟  
建久二年(八五二)  
卒  
年五十三

卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ。と色代して、しづくと歩み、信頼卿の上にむずと着きたまふ。  
光頼卿は信頼卿のためには母方の伯父なる上、大力の剛の人なれば、ことに恐れて見えられたり。右の袖の上に居懸けられて、伏し目になりて色を失はれければ、着座の公卿、あなあさまし。と見たまふに、光頼卿下襲ねの尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらんものをば死罪に行はるべしとやらん承りて、參内する所なり。抑、何事の御諍ぞ。と問ひけれども、信頼卿のものも宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて、悪しう參つて候ひけり。とて、しづくと歩みい

十日  
除日のあつた翌日

頼光頼信  
共に多田源氏滿  
仲の子

でられけり。  
庭上にみち／＼たる兵ども、これを見奉りて、あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、しいだしたることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりか頼しからん。とまをせば、傍なるもの、昔頼光・頼信とて源氏の名將おはしましき。その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、これもおはしましき。その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、こ

うち返して信頼とつき給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしますぞ。といへば、壁に耳、天に口。といふことあり。おそろし、おそろし。聞かじ。といひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。







大貳  
太宰大貳  
切目  
紀伊國日高郡切  
目村

一本御書所  
内裏の東建春門  
を入りて侍從所  
の南  
内侍所  
神鏡  
溫明殿  
紫宸殿の東宣陽  
門の西

んこと、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして切  
目の宿より馳上るなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人ら待ちうけ  
て大勢にてあなる。信賴卿が語らふ所の兵そこばくならじ。  
平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや回らすべき。もし又  
火などをかけなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼  
の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかにいはん  
や、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時に  
あるべし。右衛門督は御邊に大小事を申し合すところ聞ゆれ。  
相構へて、隙を窺ひ、玉體恙なくおはします様思案せらるべ  
し。さて主上は何處におはしますぞ。黒戸御所に。上皇は。一  
本御書所に。内侍所は。溫明殿に。劔璽は何處に。夜の御殿に。と  
左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

許由  
支那の高士  
堯が帝位をこの  
人に譲らうとい  
はれた時汚れた  
事を聞いたとて  
潁川にいつて耳  
を洗つたといふ

又朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。と宣  
へば、それは右衛門督住み候へば、その方様の女房などぞかげろ  
ひ候ふらん。と申されければ、光賴卿聞きも敢へず、世の中は今  
かくござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には信賴住み、  
君をば黒戸御所に遷し參らせたり。末代なれども流石に日月  
は未だ地に落ちたまはぬものを、天照大神・正八幡宮は王法をい  
かゞ守りたまひぬるぞ。異國にはかやらの例ありと雖も、我が  
朝にて未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。  
とて、のろ／＼しげに憚る所なく口説きたまへば、惟方は、人もや  
聞くらん。と、よにすさまじげにて立たれけれども、且は悲しくて、  
「我いかなる宿業によつてかゝる世に生れ合ひ憂き事をのみ見  
聞くらん。昔の許由にあらねども今の内裏の有様を聞かん輩



待賢門  
大内裏の東が北より三つ目の門

櫛勺  
上をはじ色に次第にぼかして下を白く威したものを

小鳥  
平家傳來の名刀

切斑  
鷹の羽の上下の黒く中の白いものを

滋籐  
間五分位置いて一寸幅に滋く籐を巻いたものを

黄月毛  
紅に黄を帯びた色

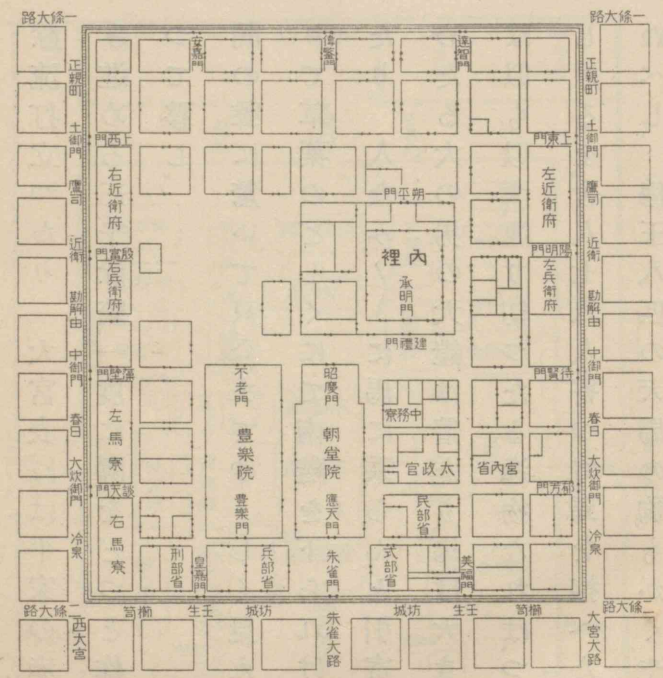
は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に着かせられし時はさしもゆゝしく見えたまひしが、君の御事をかなしみて、うち萎れてぞ出でたまひける。(平治物語)

### 五 待賢門の戦

左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に櫛勺の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締め、小鳥といふ太刀を帶き、切斑の矢負ひ、滋籐の弓持つて、黄月毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて乗り給へり。重盛のたまひけるは、年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三

樊噲  
漢の高祖の臣  
勇士  
張良  
漢の高祖の臣  
智謀に長ず

事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰か爰に樊



大内裏の圖

も共に開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺・桐壺・紫宸

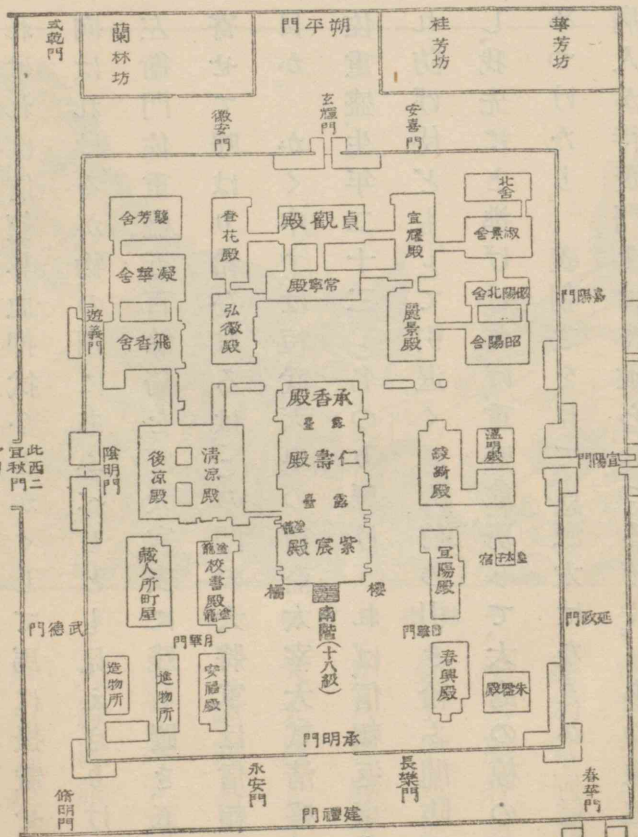


殿の前後まで兵ひしとなみ居たり。皆源氏勢なれば、白旗二十餘流打立つたり。大宮表には平家の赤旗三十餘流差上げて勇み進める三千餘騎、一度に関をどつと作りければ、大内も響き渡つて夥し。

関の聲に驚いて、只今までゆるしく見えられつる信賴卿、顔色變りて草葉のごとくにて南階を下られけるが、膝戦いて下りかねたり。人なみくゝに馬に乗らんと引寄せさせたれども、太りせめたる大の男の大鎧は着たり、馬は大きなり、乗煩ふ上、主の心には似も似ず、逸り切つたる逸物なれば、つと出でん、つと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて、乗りかねたまふ所を、侍二人つと寄つて、疾く召し候へ。とて押上げ

舍人  
馬の口取  
穆王  
支那周の代の王  
八駿馬を驅りて  
天下を周遊した

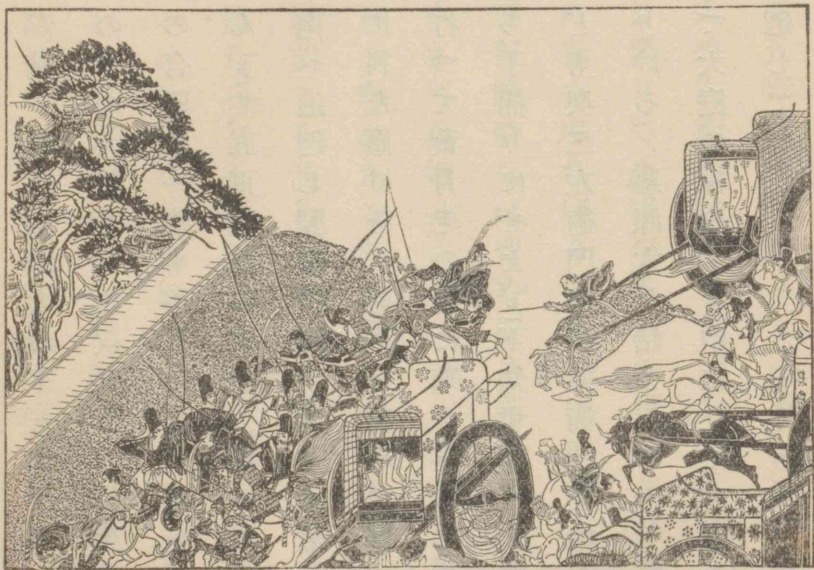
たり。餘りに押ししたりけん、弓手の方へ乗つ越して、伏様にどう



と落つ。急ぎ引起して見れば、顔に砂裏ひしと附のき、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を



いふ不覺人は臆したりな。とて、日華門を打出でて郁芳門へ向は  
 れければ、信頼鼻血押拭ひ、とかくして馬に搔載せられ、待賢門へ  
 向はれけるが、物の用にあふべしとも見えざりけり。  
 左衛門佐重盛五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百餘騎にて押  
 寄せて呼はり給ひけるは、この門の大將軍は信頼卿と見るは僻  
 目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛が嫡子左衛門  
 佐重盛、生年二十三。と名のり懸け、れば、信頼返事にも及ばず、そ  
 れ防げ侍ども。とて引退く。大將の引き給ふ間防ぐ侍一人もな  
 し、我先にと逃げければ、重盛愈、勇みて、大庭の棕の木の下まで攻  
 めつけたり。義朝之を見て、惡源太はなきか。信頼といふ大臆  
 病人が待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追出せ。と宣ひけ  
 れば、承り候。とて驅けられたり。續く兵には鎌田兵衛、後藤兵衛



平治物語繪卷の一

佐々木源三、波多野次郎三、  
 浦荒次郎、須藤刑部、長井齋、  
 藤別當、岡部六彌、太猪俣小  
 平六、熊谷次郎、平山武者所、  
 金子十郎、足立右馬允、上總  
 介八郎、關次郎、片桐小八郎、  
 大夫以上十七騎轡を雙べ  
 て馳向ふ。  
 大音聲を揚げて、この手の  
 大將は誰人ぞ。名のれ、聞  
 かん。かく申すは清和天  
 皇九代の後胤左馬頭義朝



大藏 武藏國比企郡菅  
谷村大藏  
帶刀 東宮の侍  
先生 帶刀の長官

が嫡子鎌倉悪源太義平と申す者なり。生年十五歳武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を討ちしより此の方、度々の合戦に一度も不覺の名を取らず。年積つて十九歳。見參せん。とて、五百餘騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追捲り、北より南へ追廻し、豎様横様十文字に敵をさつと蹴ちらして、端武者共に目な懸けそ、大將軍と組んで撃て。櫛の匂の鎧に蝶の裾金物、打つて黄月毛の馬に乗つたるこそ重盛よ。押雙べて組んで落ち、手捕りにせよ。と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども與三左衛門進藤左衛門を始として百騎ばかりが中にぞ隔りける。悪源太を始として十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて大庭の椋の木の中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻して、組まんくとぞ揉うだりける。十七騎に驅けたてられ

筑後守 平家貞  
平將軍 平貞盛

て、五百餘騎叶はじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。大將左衛門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つと參りて、曩祖平將軍の再び生れ替りたまへる君かな。と向ふ様に譽め奉れば、今一度駈けて家貞に見せんとや、思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻寄せたり。また悪源太駈向ひ見まはしていひけるは、「只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも今度に於ては餘すまじ。押雙べて組んで捕れ、兵ども。と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎われ先にと進みければ、今度は難波次郎同じき三郎瀬尾太郎伊藤武者所を始として百餘騎が中に隔てたるを事ともせず、悪源太弓をば小脇に搔いはさみ、鎧踏張り突立ちあがり、左右の手を擧げ、幸に義平



源氏の嫡々なり、御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん、寄れや、組まん。といふ儘に先のごとく大庭の椋の木の下を追廻して五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮表へ引いて出づ。

悪源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ、敵度々駈入るらめ。あれ速かに追出せ。といひ遣はされければ、俊綱馳せてこの由をいふに、承り候。進めや、者ども。とて色も替らぬ十七騎、大宮表に駈出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、我が子ながらも義平はよく駈けたるかな。あ、駈けたり。とぞ譽められける。

堀川  
大宮通の東の通名の如く堀川が流れてゐる

射向の袖  
鎧の左の袖  
押附  
鎧の背の最上部にある革板  
籠かつぎ  
矢竹と鎧のあつた處  
唐皮  
虎の皮で威した平家傳來の鎧

大將重盛與三左衛門景安進藤左衛門家泰主從三騎かけ放れ、二條を東へ引かれければ、悪源太鎌田にきつと目合せて、爰に落つるは大將とこそ見れ。返せや。とて追つかけてたり。既に堀川にて追つつめけるが、弓手の方に材木多く充ち満ちたるに、悪源太の乗り給へる馬かたなづけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の方へけし飛んで、小膝を折つてどうと伏す。鎌田兵衛延ばさじと、十三束取つて交ひ、よつ引いてひようと射る。重盛の射向の袖にはたと中りて飛返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちようと中りて、籠かつぎ碎けて跳り返れり。悪源太、これは聞ゆる唐皮といふ鎧ござんなれ。馬を射て、落ちん所を撃て。と下知せられければ、又よつ引いて追ひ様に筈の隠るゝ程射込みたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳ね落され、兜



も落ちて大童になり給ふ。鎌田堀川を馳せこえて、重盛に組まんと落ちあふ。重盛近づけては叶はじとや思はれけん、弓の弾にて鎌田が兜の鉢をちようと突く。突かれてゆらゆるあひだに、兜を取つて打着つゝ緒を強くこそ締められけれ。

與三左衛門馳せよつて中に隔り申しけるは、漢の紀信は高祖の命に代りて、滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。「主辱しめらるゝ時は臣死す。」といふに非ずや。景安爰に在り、寄れや、組まん。」といふ儘に、鎌田兵衛と引組んで取つて押へける處に、惡源太馬引起し、これも堀川を馳せこえて、重盛に組まんと跳んで懸りけるが、鎌田をや助くる、大將をや撃たん。」と思案しけれども、大將には又も寄せあふべし。政家を撃たせては叶はじ。」と思ひ、與三左衛門に落ちあうて三刀刺して首を取る。重盛は頼み切つたる

紀信

漢の劉邦の臣  
邦が項羽に圍まれて危かつたとき自ら邦と詐つて降りそのまに邦を落ちさせた羽は怒つて信を焼き殺した

滎陽

支那の河南省開封府滎澤縣

六波羅

平家の邸  
鴨河の東、今の六波羅密寺のあたり

芳賀矢一

國文學者  
東京帝國大學名譽教授  
國學院大學長  
文學博士  
慶應二年(五三七)  
福井藩生

景安撃たせて、命生きて何かせん。」とて既に惡源太と組まんとせられけるを進藤左衛門馳來り、家泰が候はざらん處にてこそ大將の御命をば捨てたまふべけれ。」とて、我が馬を引向け、中に隔てて惡源太とむずと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主を撃たせては叶はじと思ひければ、進藤左衛門に落重なつて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば助かり難き命なり。(平治物語)

六 軍記物語

芳賀 矢一

近古時代を文學的に代表する最初の作物は、尙敘事詩の種類に屬せる戰記物語にして、平安時代の女流物語の一變せるものな



り。即ち女流の宮廷間の情態を空想的に記述せる假構物語は實際の記述を主とせる歴史物語となり、更に轉じて戦争の記事を主とせる軍記物語となれるなり。前者に於ては年中行事の平和を記し、後者に於ては戦場の争奪修羅を記す。かれに於ての葛藤は情の結果にして、此に於ての波瀾は兵亂のための愛別離苦なり。彼の主人公の宿世は自ら招ける所なり、此の主人公の運命は時世之をして然らしめたるなり。前者の主人公は感情よく意志を支配する能はず、後者の主人公は意志よく感情を支配す。讀者は前者に於ては情緒の活動に同情し、後者に於ては情緒の壓抑に同情す。全體の境遇より言へば、前者は富貴繁榮にして羨むべきもの多く、後者は落魄亡滅にして悲しむべきもの多く、一は樂天的にして一は厭世的なり。その對照は實に

よく平安時代と鎌倉時代とを反映せるものと謂ふべく、鎌倉文學をしてこの絶好材料を得しめたるものは、即ち保元平治以來の源平二氏の轉變倏忽定まりなかりし運命の歴史に外ならず。保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記等の軍記物語は我が國民の有せる最大敘事詩といふべく、その後世の文學を感化し、民心に影響せること平安時代の物語よりも過ぎたり。いづれも其の當時の戦争の起因より時世の關係を記し、單に戦闘の記事に非ずして人をして直ちに其の時代の一般情態を想起せしむるを得るは眞箇の史筆に近きものあり。單に宮廷の事情を述べたる平安時代の歴史物語に比ぶれば、却て數等の上に在り。古來之を以て歴史の参考書として珍重したるも亦故ありといふべし。然れどもこれらの書は皆文學的の書にして決して眞



正の歴史にあらず。史學の新研究とともに、その史料としての價値は失はれたるが、之と同時に文學的價値は一層増大せるを覺ゆ。戦亂は人事の變にして、榮枯忽ち其の處をかへ、死生朝夕を分たず。君父の恩義、妻子の羈絆、いづれか斷腸の基たらざる。軍記物語はよく武人の戦場に於ける武勇の活動をうつし出せるのみならず、亦其の常人としての情愛を現し得たり。戦袍匆忙の際、尙その人情を到る處に發揮し、又詩歌音樂の風流を棄てず、武士のなさけは全篇を通じて躍動す。これその乾燥無味なる軍日記と大差ある所以にして、この點に於てホーマーの大敘事詩を讀む感あらしむるなり。而してホーマーの單に情事のみ主とせるに反して、此は道德節義之一貫し、理想的武士の面目躍如たるを以て、殊に趣味の横溢せるを覺ゆ。この書の國

Homer  
希臘の大詩人  
イリヤッド  
オデッセー  
の著者

民に愛好せられたるも故ありといふべく、後世の武勇傳説は實に源平時代を以て中心とするに至れるも亦之が爲なり。軍記物語は其の内容に於て、よく武士の武勇節義と情緒風流との兩方面を表現し、相錯綜して全體の美を構成し得たり。文辭の方面に於ても亦之と同じく、漢文の剛健なる要素と國文の優麗なる性質とは相混和して全豹の美を作せり。漢語は促音長音濁音等多く、單語として已に音の變化に富む。平安時代の物語には漢語を日本化せしが、その分量極めて尠なし。試に源氏物語の桐壺の卷を通算するに百五十餘の漢語を含めり。保元物語は一丁にして尙四十以上に及べり。「重代の」「歴代の」「不重寶なる」「奇怪なる」「一定の」「神妙の」の如き形容詞、入洛の上「晏駕の後」下向の路すがらの如き副詞、處間上等の如き副詞的接續詞、何ぞ「況



將門記  
一卷  
平將門の事を記した和様漢文の軍記

や「總じて」「就中」「以ての外に」「隨分に」「全く以ての如き副詞等、語彙の性質は全く平安時代の物語とは一變せり。「就いては」「於ては」「以ては」の如きは已に助詞として用ひらる。平安朝の「いと」「いたう」を連用し、がにをの接續詞をのみ用ひたるものに比しては、音調の上に於ても、已に一段の強みを覺ゆ。國語に於て、成つたりける「金物うつたる」の如き促音、よつ引いてひようと射る「かつうは今の面目」の如き長音、促音の變化も亦その勢力を増すものと謂はざるべからず。射られたる受身の形を射させたる使役の形にいふのみには非ず。こはこれ單語の論なれども句法に於ても、漢文訓讀そのまゝの形なるもの尠なからず。蓋し漢文戰記の祖ともいふべき將門記等には、四六文の對比を用ひたる箇所最も多し。故に軍記物語に於ても敘景の文句、戰鬪の記事乃至

四六文  
重に四字と六字の句で對した漢文の一體  
六朝時代に盛んに行はれた

駢儷文  
四六文に同じ

は人物の對話も、その送假名を省けば、直に立派なる四六文になり得べき箇所尠なからず。句法緊縮して冗漫に陥らず、最もよくその内容に相應せり。しかも亦一方風流韻事を寫すにあたりては、純國文の優麗閑雅なる句法を棄てずして、よく歌物語の半面を存し、或は勁健に、或は優麗に、姿致極めて多し。男子の語と女子の語とはよく混和して用ひられたりといふべく、語を換へて言へば、漢文と國文との調和茲に成れるなり。而して亦已に言文一致にはあらざるなり。

四六駢儷文は一種の韻文にして、對比の語句を用ふるを常とす。之を作るや、博く古典の事物を引用して、語々句々彫琢これ事とす。戰記物語の文即ち之を受けて對偶の句をなす事最も多し。一事を敘ぶる必ず類例を古代に求めて、昔は何今は何と比較す



るなり。或は之を他國に求めて、漢土の何は、天竺の何は、日本の何はと對照するなり。讀者をして古今東西の事例に俯仰感慨を催さしむるなり。嘗に一句一節の上に之を對照せるのみならず、更に之を擴張しては、一章一篇にも及し、敘事の談話は直ちに支那印度の類例の敘述に入る事例へば高綱賜姓名事といへば、其の下に紀信假高祖名事といふが如きの類、平家物語、太平記等比々皆然らざるはなし。

かくの如く故事出典を引證するとともに、古人の成句を引證するも亦六朝文學の影響にして、即ち漢文の感化に外ならず。こは已に平安朝の女流文學に於ても見る所にして、源氏物語にも古歌古句を引證すること多かり。とりもなほさず、當時の才人は此の銜學の風を以て誇とせしなり。軍記物語に至りては、一

六朝  
吳 東 晉  
宋 齊 梁 陳  
支那の漢と唐との間の六朝で南京に都した時代

層甚だしくして、或は内外經典の語句を引用し、或は詩歌朗詠の佳句を挿入し、古人の成句を點綴して應接に遑無からしむ。ゆゑに古人の成句たるを知らざる人に取りては興味自ら索然たらざるを得ず。謠曲の華文の如きに至りては、全く故人の錦繡を點綴したるものに過ぎず。これ一方に於ては獨創なく知識なく只管古代を尊奉せる時代の現象たると同時に、無學はいよいよ銜學の風を養成し來れる時世に於ける必然の情態たるべし。

無學時代に於ける銜學の風は教訓を伴ひ、説法となる。軍記の敘事詩は篇中の要處には常に教訓を伴ひ、説教を含めり。古語を引き古例を引證するも、歸納的にその世間にあり得べき事實にして、古人の已に看破せるところあるを説きて教訓の資



に供せん爲のみ。忠孝仁義等に關しての教訓は所在これあり。攻城野戰に際しては、水泳の法を説き、御馬の法を教へ、音樂風流の談には和歌の由來を説き、音樂の傳統をのぶ。氏人の祖先素生、地所の史傳説話、公事節會の由來、一として學究的態度を以て必ず其の由來變遷を物語らざるなし。こゝに於て敘事詩は半ば教科書の如く、今日より見れば興趣を殺ぐこと尠なしとせず。蓋し其の精神に於ては古句を引用するものと相同じきなり。殊に佛者の傳記、寺院の緣起、經典の意義等を説くこと最も詳密なるは、作者の境遇亦平安時代と全く一變したるを證するものと謂ふべし。(國文學史概説)

大原

山城國愛宕郡大

原村

京都の北四里

高野川の上流に

ある

法皇

後白河法皇

建禮門院

平徳子

清盛の女

高倉天皇の中宮

平家滅亡後尼に

なつて大原の寂

光院に隱栖され

た

北祭

賀茂の葵の祭

四月中の酉の日

今は五月十五日

徳大寺

左大将藤原實定

花山院

大納言藤原兼雅

土御門

權中納言源通親

補陀落寺

山城愛宕郡大原

### 七 大原御幸

かゝりしほどに法皇は文治二年の春の比、建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思召されけれども、二月彌生のほどは嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ、夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には徳大寺・花山院・土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。

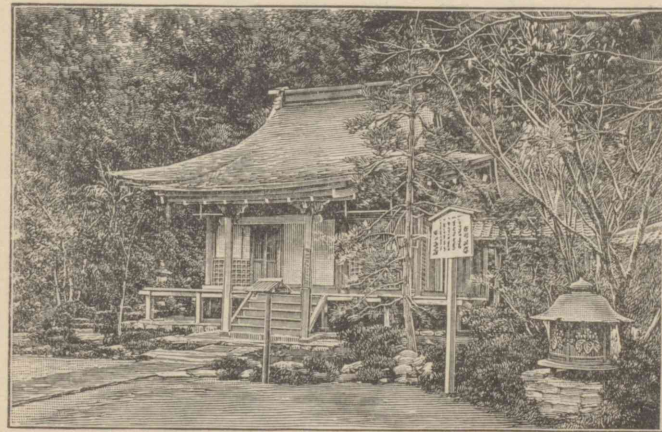
鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原深養父が補陀落寺、小野皇太后宮の舊蹟窺覽ありて、それより御輿にぞめされける。遠山にかゝる白雲は散りにし花のかたみなり、青葉に見ゆる梢には春の名残ぞ惜まるゝ。頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草



の近くにあつた  
小野皇太后宮  
藤原歡子  
關白欲迎の女  
後冷泉天皇の皇  
后

寂光院  
大原村にある寺  
天台宗

蔓破れては  
此の句出所が分  
らない



すかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波のうら紫にさけ

寂 光 院

なれたる方もなく、人跡絶えたる  
程も思召し知られてあはれなり。  
西の山の麓に一字の御堂あり。  
即ち寂光院これなり。古う造り  
なせる泉水木立、由あるさまの處  
なり。蔓破れては霧不斷の香を焼  
き、扉落ちては月常住の燭をかゝ  
ぐ。とは、かやうの處をや申すべき。  
庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂り  
つゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさら

池水に  
千載集に「みこ  
におはしましけ  
る時鳥羽殿に渡  
らせ給へりける  
頃池上花といへ  
る心をよませ給  
ひける院御製」  
と見えてゐる

しのぶ  
のきしのぶ  
瓦葺  
忘草  
萱草  
瓢箪  
瓢箪屢空、草葺  
淵之巷、藜藿  
深鎖雨濕、原憲  
之楯。  
(朗詠集稿直幹)

昭和三年  
十月  
の試験  
いしもの

る花、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重  
立つ雲の絶間より山杜鵑の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。  
法皇これを叡覽あつてかうぞ遊ばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、  
波の花こそさかりなりけれ。

舊りにける岩の絶間より落來る水の音さへゆるよしある處な  
り。綠羅の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し。さて女院  
の御庵室を叡覽あるに、軒には葛朝顔はひかゝり、しのぶ交りの  
忘草、瓢箪屢空し、草顔淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞  
を濕す。ともいひつべし。板の葦目もまばらにて、時雨も霜もお  
く露も、洩る月影に争ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は  
山前は野べいさゝをざさに風さわぎ、世に立たぬ身の習とて、う



五戒 殺生 偷盜 邪淫 妄語 飲酒  
 十善 不殺生 不偷盜 不邪淫 不妄語 不兩舌 不惡口 不綺語 不貪慾 不瞋恚 不邪見

きふししげき竹柱都の方の言づては間遠にゆへるませ垣や、わづかに言とふものとは、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら、青つゝら、くる人稀なる處なり。

法皇、人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申すものもなし。やゝありて老い衰へたる尼一人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ花摘に入らせたまひて候。」と申す。さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや。御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報盡きさせたまふによりて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜ませたまひ候べき。因果經には、欲知過去因、見其現在果。

欲知未來果、見其現在因。」と説かれたり。過去未來の因果をかねて悟らせ給ひなば、つや／＼御歎あるべからず。」とぞ申しける。

この尼の有様を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬものを結び集めてぞ着たりける。「あの有様にてもかやうのことを申す不思議さよ。」とおぼしめして、「抑、汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、「この尼さめ／＼と泣いて、しばしは御返事にも及ばず。ややありて涙をおさへて、申すにつけて、憚り覚え候へども、故少納言入道信西が女、阿波内侍と申す者にて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、



(藏院光寂) 像侍内波阿



三尊  
彌陀  
觀音  
勢至  
中尊  
彌陀  
普賢  
普賢菩薩  
善導和尚  
支那隋から唐へ  
かけての代の高  
僧  
八軸の妙文  
法華經  
九帖の御書  
善導和尚の觀無  
量壽經の疏九帖

身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。とて袖を顔に押當て、忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇げにも汝は阿波内侍にてあるごさんなれ。御覽じ忘れさせたまふぞかし。何事につけても只夢とのみこそ思召せ。とて御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿、殿上人も各感じ合はれけり。さてかなたこなたを觀覽あるに、庭の千草露重く籬に倒れかゝりつゝ、そとももの小田も水越えて鳴立つ隙も見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて觀覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚くわんどう並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書もおかれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を觀覽あるに、御寢所と



(藏院光寂) 像御院門禮建

おぼしくて竹の御竿に麻の御衣、紙の袂など懸けられたり。さしも本朝漢土のたへなる類數をつくし、綾羅錦繡の粧もさながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿、殿上人もまのあたり見奉りしことゝも、今のやうに覺えて、皆袖をしぼられけり。やゝあつて上の山より濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩の懸路かきぢを傳ひつゝ、おり煩ひたる様なりけり。法皇あれはいかなる者ぞ。と仰せければ、老尼涙を抑へて、花筐臂にかけ岩躑躅取具して持たせ給ひて候は女院に渡らせたまひ候。爪木に蕨折添へて持ちたるは、



鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言佐局と申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の殿上人も皆袖をぞぬらされける。女院は、世を厭ふ御習といひながら、今斯る有様を見え參らせんずらんはづかしさよ。消えも失せばや。と思召せども、かひぞなき。宵々ごとの闕伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに、曉起の袖の上、山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へも歸らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしませず。あきれて立たせましゝたる處に、内侍の尼參りつゝ、花筐をば賜はりけり。〔平家物語〕

### ハ 承久の役

承久三年(一一八二)

御門

順徳院

春宮

懷成親王

即ち仲恭天皇

中院

土御門上皇

本院

後鳥羽法皇

承久も三年になりぬ。卯月二十日、御門おりさせ給ふ。春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。近ごろ皆この御齡にて受



後鳥羽天皇(攝津國水無瀬宮藏)

禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日、院號のさだめありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中院と申し、父御門をば本院とぞ聞えさする。さて、院のおぼし構ふる事、忍ぶとすれど、やうゝ漏れ聞えて、東ざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつゝかれを御かうじのよし仰

ハ 承久の役

蓋



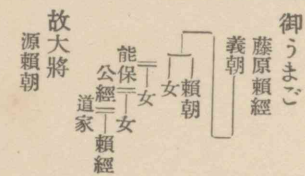
せらるれば、御方に參るつはものどもおし寄せたるに、遁るべきやうもなく、腹切りてけり。まづいとめてたしとぞ院は思召しける。

あづまにも、いみじうあわて騒ぐ。「さるべくて身の失すべき時にこそあなれ。」と思ふものから、討手の攻來りなむ時に、はかなきさまにて屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、自らし給ふことならねば、かつは我が身の宿世をも見るばかり。」と思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人をかしらとして、雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。泰時を前にすゑていふやう、おのれを、この度、都にまゐらする事は、思ふ所おほし。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろを見えなむには、親の顔また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども、義時君の御ため

に後めたき心やはある。されば横さまの死にをせむ事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、再びこの足柄箱根山は越ゆべし。など泣くくゝいひ聞かす。「まことにしかなり。また親の顔拜まむ事もいとあやふし。」と思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかぎりとおはれに心細げなり。

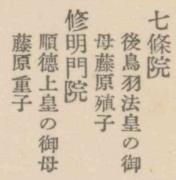
かくてうちいでぬるまたの日、思ひがけぬほどに、泰時只一人、鞭を上げて馳來たり。父胸うちさわぎて、いかにと問ふに、軍のあるべきやう、大方のおきてなどをば、仰の如くその心を得侍りぬ。若し道のほとりにも、圖らざるに、辱く鳳輦をさきだて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らむに參りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからむ。この一ことを尋ね申さむとて、一





人馳せ侍りき」といふ。義時とばかりうち案じて、かしこくも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて弓を引くことは、いかゞあらむ。さばかりの時は、兜をぬぎ弓の弦をきりて、偏にかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから、軍兵をたまはせば、命を捨て、千人が一人になるまでも戦ふべし」といひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつる事なれば、武士ども召しつどへ、宇治勢多の橋もひかせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の大將一人のみなむ、御うまごのこともさる事にて、北の方、一條中納言能保といふ人の女なり、その母北の方は、故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の



御心の軽き事とあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信・尾張中將清經・中御門大納言宗家、又、修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎ／＼あまた聞ゆれど、さのみは記しがたし。軍にまじりたつ人々、此の外の上達部にもあまたありき。

中院はあかで位をすべり給ひしより、言に出でてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御騒にもことにまじらひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづ軍の事などもおきて仰せられたり。

いつの年よりも五月雨はれ間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡しがたければ、攻めのぼる武士どももあやしくなやめり。かゝれども、遂に都に近づくよ



し聞ゆれば、君の御武士もいでたつ。その勢六萬餘騎とかや、宇治勢多へ分ち遣はす。世の中響きの、しるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界におちくだり、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかゞあらむと君も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたしく色を失ひたるさまども、頼もしげなし。水無月十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂にみかたの軍破れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたり惑ふ。

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元の例にや、院の上都の外に遷し奉るべしと聞ゆれ

ものにもがなや  
とりかへすもの  
にもがなや世の  
中をありしなが  
らのわが身と思  
はむ(源氏物語  
河海抄引歌)

信實

藤原信實

肖像畫に長ず

文永二年(一一三三)

歿

年八十九

ば、女院宮々、處々におぼしまどふ事さらなり。本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、綱代車のあやしげなるにて、文月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさまじうあはれなり。「ものにもがなや」と思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらむ。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はむとなり。かくて同じき十三日に御船にたてまつりて、遙なる浪路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず。いみじう、いかなりける代代の報にかと恨めし。

新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや、文月七日、御門をもおろし奉りき。この卯月かるとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢の



増鏡  
 山トハ  
 約  
 著者不明  
 鏡類  
 四鏡  
 大鏡  
 増

やうなり。さて上達部殿上人、それより下はた残りなく、この事にふれにしたぐひは重く軽く罪に當るさまいみじげなり。中院は、初よりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、長閑にて都にあらむ事いと恐れありと思されて、御心もて、その年閏神無月十日、土佐の國の幡多といふ處に渡らせ給ひぬ。道すがら雪かきくらし、風ふき荒れ、吹雪して、來しかた行くさきも見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りてわりなき事多かるに、

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ、  
 ことわり知らぬ我が涙かな。

せめて近きほどにと、あづまより奏したりければ、後には阿波の國にうつらせ給ひにき。(増鏡)

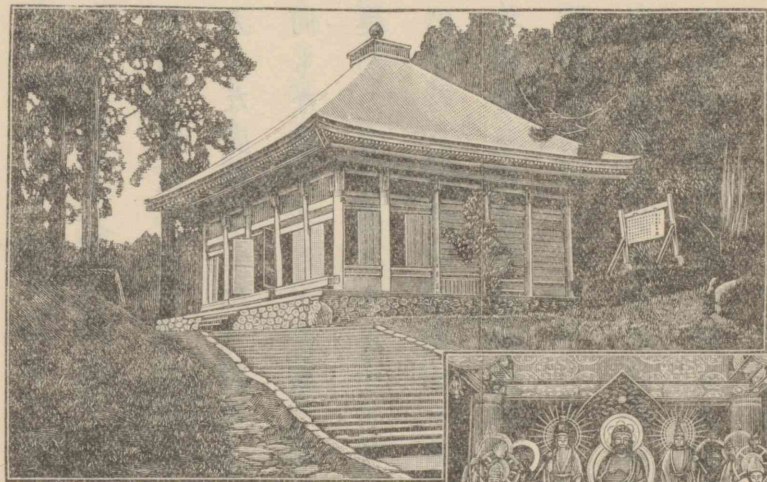
九 七寶の柱

泉鏡花

七寶  
 金銀瑠璃車渠瑪瑙  
 琉璃瑠璃珠  
 泉鏡花  
 名は鏡太郎  
 小説家  
 明治六年金澤市  
 生  
 中尊寺  
 陸中國磐井郡平  
 泉村關山にある  
 古寺  
 藤原清衡創立  
 金色堂經藏は平  
 安時代のもの現  
 存

山道、二町ばかり、中尊寺はもう近い。大きな廣い本堂に、一體見上げるやうな釋尊のほか、寂寞として何も無い。それが莊嚴であつた。日の光が幽かに漏れた。裏門の方へ出ようとする傍に、寺の厨があつて、其處で巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、はじめ藥師堂、次に寶物庫、さて金色堂所謂光堂。續いて經藏、辨財天といふ順序である。皆、參詣の人を待つて、はじめて扉を開く、すぐ又あとを鎖すのである。が、寶物庫には番人が居て、經藏には年の若い出家が、火の氣もなしに一人經机に對つて居た。





金 色 堂 と 彌 陀 三 尊 尊

はじめ、薬師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、この番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。枝もたわゝに咲いた階の前の八重櫻が芝生に美しく散り敷いてゐた。櫻は中尊寺の門内にも咲いて居た。麓から上らうとする坂の下の取附の處にも一本見事なのがあつて、山中心得の條々を記した制札と一

所に、たしか「浅黄櫻」と云ふ札が建つて居た。けれども、それのみには限らない。處々汽車の窓から見た櫻は、奥が暗くなるに従つて、ぱつと冴を見せて咲いたのはなかつた。薄墨・鬱金、また其の浅黄といつたやうな、どの櫻も、皆ぼつとりとして曇つて、暗い紫を帯びて居た。雲が黒かつたためかも知れない。唯、階の前の花片が折柄の冷たい風に、ぱらぱらと誘はれて、さつと散つて、此の光堂の中を空ざまにひらりと紫に舞ふかと思ふと――羽目に浮彫した、孔雀の尾に玉を刻んで、緑青に錆びたのが、なほ嚴かに美しい、其の翼をばらばらとたゞいて――ちらちらと床にこぼれかゝる――と宙で、黄金の卷柱の光をうけて、ぱつと金色に翺るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を睜つた。柱は固より、床も、承塵も、イめるものゝ踏む處は、黒漆の落ちた黄



十二光佛 阿彌陀の功徳を十二の光に配した佛  
 須彌壇 佛像のすまはれる壇  
 二天 日天子 月天子  
 六地藏 地藏菩薩を六像に配當したもの  
 清衡 藤原秀郷七世の孫  
 基衡 清衡の子  
 秀衡 基衡の子  
 鎮守府將軍に任ぜられた  
 文治三年（一八四七）卒

金である。黄金の剝げた黒漆とは思はれないで、而も些のけばけばしい感じが起らぬ。さながら、金粉の薄雲の中に立つた趣がある。われら仙骨を持たない身も、此の雲は踏んでも破れぬ。其の雲を透かして、四方に、七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しき虹を、其のまゝ柱にして描かれたる十二光佛の微妙なる種々相は、一つく、錦の絲に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中にあらはれて、清く明かに、而も幽かなる幻である。其の十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流るゝが如く輝かして、寶相華・勝曼華が透間もなく咲きめぐつて居る。此の柱が、須彌壇の四隅にある。まことに天上の柱である。須彌壇は四座あつて、壇上には彌陀・觀音・勢至の三尊、二天・六地藏が安置され、壇の中は、眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、此

雛芥子 虞美人草

迦陵頻伽 梵語 妙音鳥  
 Kalavinka 妙音鳥  
 文殊師利 梵語 妙徳  
 Monjusri 梵語 妙徳  
 釋迦如來の智慧を掌する

に、各、一口の劔を抱き、鎮守府將軍の印を帶び、錦袍に包まれた三つの屍がまだ其のまゝに横たはつて居るさうである。雛芥子の紅は美人の屍より開いたと聞く。光堂はこゝに三個の英雄が結んだ金色の果なのである。謹んで辭して、天界一叢の雲を下りた。階を下りざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巢がかゝつて、風に軽く吹かれながらきら／＼と輝くのを、不思議なる塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。さて經藏を見よ。また彌が上に懐かしい。羽目には、天女——迦陵頻伽が髣髴として舞ひつゝ、かなでつゝ浮出て居る。影をうけた束貫の材は、鈴と草の花の玉の螺鈿である。漆塗、金の八角の臺座には、本尊文殊師利、朱の獅子に騎し



優闍王 釋迦時代の印度の國王  
 Udayana 佛敎の篤信者  
 善財童子 文殊の弟子  
 Sudhana 藥草を採つて文珠に捧げたことがある  
 淨名居士 梵語維摩羅詰  
 Vimalakūti 釋迦時代の居士  
 佛陀波利 佛の經譯者の一人  
 Budhapeli

ておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口を開けた青い毛の部厚な横顔が見られるが、づづつと足を舉げさうな構である。右に此の轡を取つて、一寸振向いて、菩薩にものを言ひさうなのが優闍王、左に一匣を捧げたのは善財童子、この兩側左右の背後に、淨名居士と、佛陀波利が、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかつぐやうに杖づいて立つ。額も、目も、眉も、其のいづれもにこゝとして、文珠も微笑んでまします。



藤原清衡・基衡・秀衡畫像

一切經 佛敎に關する一切の經  
 大藏經ともいふ  
 五千四十七卷乃至  
 八千五百三十四卷

第一獅子が笑ふ、獅子が。此の須彌壇を左に、一架を高く設けて、こゝに紺紙金泥の一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥銀泥で、本經の圖解を描く。清麗巧緻にして且神祕である。架の裏に、色の青白い、瘦せた墨染の若い出家が一人居たのである。私の一禮に答へて、「御緩り、御覽なさい。」二三の散佚はあらうが、言ふまでもなく、堂の内壁にめぐらした八つの棚に満ちて、二代基衡の此の一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書の一切經、並に判官最原の第一人者、三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板の一切經が、みな黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちて居る。——一切經の全部量は、七駄片馬と稱するのである。



「拜見をいたしました。」  
「はい。」

と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で、卷袖で、寒く細りと草を行く。清らかな僧であつた。

「辨天堂を案内しますで。」

と車夫が言つた。

向ふを、墨染で一人行く若僧の姿が、寂しく、而も何となく、正に、まさしく彼處におはする——天女の御前へ、われらを導く、つゝましく、謙讓なる一個のお取次のやうに見えた。

經堂を出た今は、眞晝ながら、日光に酔ひ、桂の香に巻かれた心地がして、亂れたまゝの道芝を行くのが、青く清明なる圓い床を通るやうであつた。



吉 祥 天 女 (藥師寺所藏)



淨瑠璃寺  
山城國相樂郡當  
尾村門前  
笠置山の近く

階の下に立つて仰ぐと、典雅優麗なる「辨財天」の金字に縁ふちして、牡丹花の額がかゝる。——年ふる雨露に、彩色のかすかになつたのが、木地の胡粉を却てゆかしく現はして、萌黄に群青の影を添へ、葉をかさねて、白緑碧藍の花をいだく、さながら瑠璃の牡丹である。

ふと、高縁の雨落に、同じ花が二三輪咲いて居るやうに見えた。扉がぎい、ぎり／＼と——僧の姿は、裏に隠れつゝ見えずに開く。ぼかんと立つたのが極りが悪い。あゝ、もう彼處から透見をなすつたとさう思ふほど、眞白き面影、天女の姿は、すぐ其處にあらはれ、蜀紅の錦といふ天蓋も廣くかゝつて、眞黒き御髪の寶釵の玉一つをも遮らない、御面影の妙なること、御目ざしの美しさ、——申さんは畏多い。たゞ、西の方遙かに山城國、淨瑠璃寺、吉祥天



のお寫眞に似させ給ふ。白理、優婉、明麗なる十八九ばかりのほ  
 ぼ人だけの座像である。  
 と、手をついて對したが、見上ぐる瞳に、御頬のあたり、幽かに、いま  
 にも莞爾と遊ばしさうで、まぎ／＼とは拜めない。  
 さて壇を退きざまに、僧のとざす扉につれて、畏くも御名残さへ  
 惜まれまゐらすやうで、涙ぐましく又額を仰いだ。御堂そのま  
 ま、私は碧瑠璃の牡丹花の裡に入つて、又牡丹花の裡から出たや  
 うであつた。  
 花の影が、大きな蝶のやうに草に映じた。  
 下向の時あらためて、見晴しの四阿に立つた。  
 伊勢、龜井、片岡、鷲尾、四天王の松は、畑中、畝の四處に、雲を鎧ひ、揺絲  
 の風を浴びつゝ、或ものは肅々として衣川に枝を聳かし、或もの

松尾芭蕉  
 忠左衛門宗房  
 號は桃青ともい  
 ふ  
 伊賀國上野生  
 元祿七年(三五)  
 歿  
 年五十一  
 十一日  
 元祿二年(三三)  
 五月  
 あねはの松  
 陸前國栗原郡澤  
 邊村姉齒にあつ  
 た松  
 緒絶の橋  
 陸前國志田郡古  
 川町にあつた小  
 橋  
 雉兎芻蕘  
 文王之園方七十  
 里、芻蕘者往、  
 雉兎者往焉。(孟  
 子)  
 黄金花咲く  
 すべろぎの御代  
 榮えむとあづま  
 なるみちのく山  
 に黄金花咲く  
 (萬葉集)

は戀々として、高館に梢を伏せたのが、彫像の如くに眺められる。  
 其の高館の址を靜にめぐつて、北上川の水は、はる／＼、瀬もなく、  
 音もなく、雲の果さへ見え、たゞ「はる／＼」といふやうに流れる  
 のである。(七寶の柱)

10 奥の細道

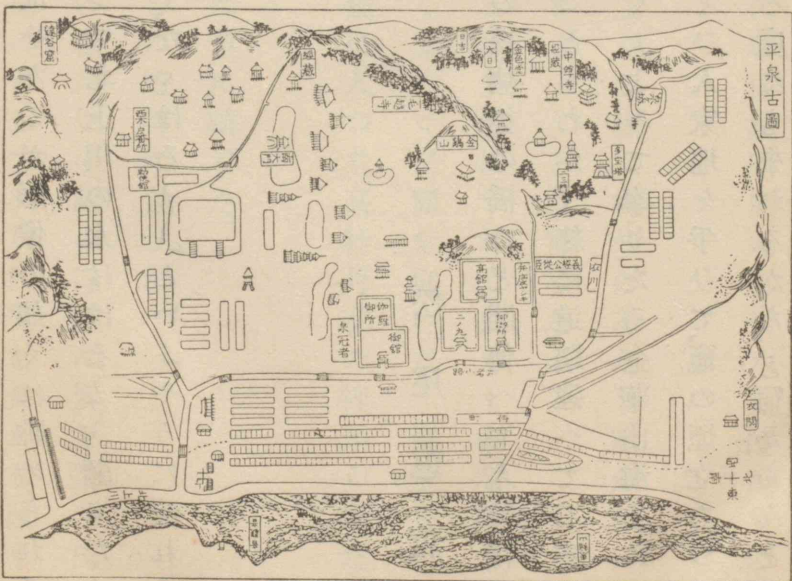
松尾芭蕉

十二日、平泉と志し、あねはの松、緒絶の橋など聞傳へて、人跡稀に、  
 雉兎、芻蕘の行きかふ道、そこともわかず、終に道踏違へて石巻と  
 いふ港に出づ。「黄金花咲く」とよみて奉りたる金華山海上に見  
 渡し、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひて、竈の煙立ちつゝ  
 きたり。「思ひがけずかゝる處にも來れるかな」と宿からんとす



袖の渡 陸前國桃生郡橋浦村にあるといふ  
 尾駁の牧 石巻の近くか  
 眞野の萱原 陸前國牡鹿郡稻中眞野  
 石巻の東  
 長沼 陸前國登米郡新田村新田沼  
 戸伊摩 同郡登米町といふ  
 三代 藤原清衡・基衡・秀衡  
 文治五年(八四九)秀衡の子泰衡が頼朝に滅された一炊の夢  
 盧生が邯鄲の宿屋で黄梁を炊く間に見た富貴の夢

れど、更に宿かす人もなし。やう／＼貧しき小家に一夜を明して、明くれば又知らぬ道迷ひゆく。袖の渡、尾駁の牧、眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。その間二十餘里程と覺ゆ。三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里こなた



(志革沿館高州奥)圖古泉平

金鷄山 秀衡の築いて平泉の鎮護とした山  
 高館 高館の西  
 南部 平泉驛の北凡そ六町  
 衣川 盛岡地方  
 泉が城 北上川に入る支流  
 泉三郎忠衡の居城か  
 國破れて 國破山河在、城春草木深。感時花濺淚、恨別鳥驚心。烽火連三月、家書抵萬金。白頭搔更短、渾欲不勝簪。(杜甫)兼房  
 義經の郎黨増尾七郎  
 年六十餘で白髪をふり立て奮闘して義經に殉死した

にあり。秀衡が墟は田野になりて金鷄山のみ形を遺す。まづ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて、高館の下にて大川に落入る。泰衡等が舊跡は衣



像燕芭尾松

が關を隔て、南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。

にして草青みたり。と、笠打敷きて時の移るまで涙を落しぬ。

夏草や、つはものどもが夢の跡。卯の花に兼房見ゆる白髪かな。

曾良



曾良  
河合惣五郎  
芭蕉の弟子でこ  
の旅に供をした  
もの  
信濃諏訪生  
寶永六年(三三六)  
歿

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を遣し、光堂  
は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉  
風に破れ、黄金の柱、霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべき  
を、四面新にかこひ、蔓を覆うて、風雨を凌ぎ、姑く千歳の記念とな  
れり。

さみだれの降りのこしてや、光堂。(奥の細道)

### 二 藤の花

草臥れて宿借るころや、藤の花  
五月雨をあつめて早し、最上川  
菊の香や、奈良には古き佛たち

松尾芭蕉

向井去來

肥前の人  
京都に住む  
寶永元年(三三三)  
歿

内藤丈草

尾張の人  
近江栗津に隱栖  
元禄十七年(三  
三三)歿

服部嵐雪

淡路の人  
江戸に住む  
寶永四年(三三七)  
歿

榎本其角

近江の人  
江戸に住む  
寶永四年(三三七)  
歿

杉山杉風

三河の人か  
江戸に住む  
享保十七年(三  
三三)歿

春花園凡兆

加賀の人  
京に住む  
年八十三

初時雨、猿も小蓑をほしげなり	向井去來
秋風や、白木の弓に弦はらん	向井去來
おうくといへど叩くや、雪の門	向井去來
啄木鳥の枯木探すや、花の中	内藤丈草
わがこと、泥鰌の逃げる根芹かな	内藤丈草
梅一輪、一輪ほどのあたゝかさ	服部嵐雪
黄菊白菊、その外の名はなくもがな	服部嵐雪
猫の子のくんづぼぐれつ胡蝶かな	榎本其角
夕立や、家をめぐりて家鴨鳴く	榎本其角
行きくゝて倒れふすとも萩の原	河合曾良
子や待たん、あまり雲雀の高あがり	杉山杉風
ながくくと川一筋や雪の原	春花園凡兆



與謝蕪村  
攝津國天王寺の  
人  
京都に住む  
天明三年(一八一三)  
歿年六十七

炭太祇

京都の人  
明和八年(一八二二)  
歿年六十三

高井几董

京都の人  
寛政元年(一八一九)  
歿年四十九

小林一茶

信濃の人  
文政十年(一八二八)  
歿年六十五

萩原井泉水

名は藤吉

俳人  
明治十七年東京  
生

與謝蕪村

春の海、ひねもすのたりくかな  
ほとゝぎす、平安城をすぢかひに

日は斜、關屋の檜に蜻蛉かな

落葉して遠くなりけり、白のおと

山路來て向ふ城下や、凧のかず

犬を打つ石のさてなし、冬の月

春の泊、鯛よぶこゑや濱のかた

雀の子、そこ退けくお馬が通る

大根引、大根で道を教へけり

炭太祇

高井几董

小林一茶

### 二 芭蕉と一茶

萩原井泉水

俳句興つてから今日まで三百年、其の俳句史中に於て最も注意せらるゝものは芭蕉と一茶とである。芭蕉は自分の全人全心を以て俳句に向つた、彼は善き句を作らうと意圖するよりも、寧ろ善き生き方をしようとしたらしい。而して彼の生活が純になればなるほど、彼の藝術としての俳句が醇になつて來たのである。一茶にあつては、其の人と其の俳句とが、びつたりと一つである、彼の吐く息が其のまゝ、俳句になるかと思はれるほど、自然に而して無造作に句作した。而して其の作が悉く一茶になつて躍動してゐる。私は思ふ、俳句は「心」の藝術である。又は「境地」の藝術である。俳句がたゞ表現として、言葉として、其の意味を傳へるだけに止るならば、それは僅かに十七字の小さな藝術(といふよりも寧ろ繊細な工藝品)に過ぎまい。俳句は如何に小



くとも、其の作者の人間としての素質を、其の傾向を、而して作者の自然に對する態度を、觀照を、全的に盛つてゐるものであつてこそ、始めて一つの藝術として特殊な位置を占め得るのである。そこで芭蕉の句と一茶の句とを較べて見ると、其の風格でも趣味でも、がらりと違ふ。それでゐて、どちらも本當の俳句に違ない。後世芭蕉を真似てそれらしく作つた作が一向につまらなくて、芭蕉とは全く毛色も風味も變つた一茶の句が、芭蕉と同様に世間から賞翫されてゐるといふ事は面白い。これも俳句には本來、俳句といふ趣味があるのでなくて、俳句は其の人の反映として光るといふ意味を語つてゐるものではないか。芭蕉と一茶とは、共に俳句を生かしたと云へる。俳句といふものは芭蕉以前から存在してゐたが、和歌の三十一字を折半した

る形だけに過ぎなかつた。それに新しい精神を吹込んだものが芭蕉である。芭蕉去つて以後、俳句は芭蕉の摸倣者に依つて盛に弄ばれたが、精神なき形骸だけのものになつてしまつてゐた。それを再び新しい精神に於て生かした者が一茶である。芭蕉と一茶とは凡そ百二十年を隔てゝゐるのであるが、一茶の句になると、芭蕉のとはすつかり變つて、近代的な心持になつてゐる。此の差別は此の二人の素質の差である。芭蕉は人から施されて生活してゐたものだが、彼は貫つて食ふといふ事を、めでたき人の境遇だといふ風に考へてゐたらしい。賤しい乞食ではなくて、人から淨財を受くる高僧の風がある、金の事などには心を煩はさぬといふ風な所がある。で、芭蕉の句には、凡て彼の高貴な風格がにじみ出てゐる。其の句の取材や言葉に於て



は俗語を嫌はなかつたが、其の趣味は非常に洗煉されたもので、即ち「俗」を去つて「雅」を磨いたのである。芭蕉が一句を作るのは容易な事ではないらしい、推敲を重ねて出来るといふ風である。つまり俳句といふ小さい形が、芭蕉の作にあつては珠玉の如く見出されて、小さくして貴いものに位づけられたのである。是も俳句といふ小さな形を生かす一つの正しい路であるに違ない。併し一茶の行き方はまるで違ふ。彼は芭蕉のやうに句作に苦しんだ風はない、敢へて風雅の道に向上しようなどとも心懸けない。たゞ思ふ所、感ずる所を表現しようとした。彼の日記で見ると、毎日數句づゝ何十年と作り續けてゐた。而して、かく安易に作られるものとしては俳句のやうに短い手輕い詩形でなければなるまい。此の意味で、一茶は俳句といふものを、民

Ivory tower 象牙の塔  
藝術の殿堂  
美の世界

衆的な誰でも出来る詩としたのである。一體一茶といふ人の素質からして、芭蕉のやうに高貴な所はない。彼は自ら「乞食首領」などと文には書いてゐるが、彼は自分から好んで無所有の境涯に入るやうな氣持はない。父の遺産分配に就いて、異母弟と争つて訴訟まで起さうとした事もある。物質的の欲望に於ては、世間一般の人の心持と大なる相違はない。彼は何處までも民衆の中にあつて民衆の聲を揚げてゐる。芭蕉は聖僧らしく、そこが芭蕉の偉い所であるが、ともすると象牙の塔に隠れてしまひたがる。一茶は何處までも下座に着いてゐるので、あぶなげがない。而して凡ての人の親しい友達となる。芭蕉風の俳句の行き方は高踏的である、少數の天分あり氣根ある人の達し得る所を目がけて進む。一茶流の俳句の行き方は民衆的であ



る、萬人向きである、誰にでも手が届く、而して誰にでも親しまれるものである。此の二人は別々の意味に於て俳句を生かしたのである。

芭蕉と一茶とは共に俳句を以て自分を謂かしたとも謂へる。芭蕉は初め俳句で身を立てようとは思つてゐなかつたが、ずるすると好む所に引込まれてしまつたといふ事を、笈の小文の中に「しばらくは身を立てんことを願へども是(俳諧)が爲にさへられ、しばらく學んで愚を曉さん事を思へども是が爲に破られ、遂に無能無藝にして只此の一筋(俳諧の道)につながる」といつてゐるが、此の一筋の爲に、彼は自分を本當に生かしたとも謂へる。芭蕉の同じ文の續きに、西行の和歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休の茶に於ける、其の貫通するものは一なり。しかも風雅に

笈の小文

芭蕉が四十四歳の冬から四十五歳の夏にかけて吉野の方へ行脚した時の芳野紀行を収めてある

於けるもの造化(自然)に従ひて四時を友とす。見る所花にあらずといふことなし。思ふ所月にあらずといふことなし。形花にあらざる時は夷狄に等し。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出て鳥獸と離れて造化に従ひ造化に歸れとなり」といつ

ぬる池や蛙飛びこむ水の音はせを

芭蕉

芭蕉 斯く悟入せしめ、そこに安住を得しめ

たものは、此の一筋の道につながつて深く進んだ爲であつた。彼が棺を蓋うてから見ても、芭蕉といふ人は、其の一生を立派に生ききつた人だ(是ほど五十年の短い生を完成せしめた人は稀だ)と謂へる。而して、彼を斯く生かしたのは俳句の力であつたと謂へる。彼は句作には随分苦しんだ。それは俳句の言葉を

ふる池や蛙飛びこむ水の音はせを



練る爲ではなく、それに依つて自分の心境を磨く爲に苦しんだのだ、佳き句を産む爲には、心の木を佳くしなければならぬ故に——例へば、禪門の徒が一つの公案を呑んで坐禪辨道をするやうに、彼は俳諧道の向上を以て、即ち自己心境の向上に資したのである。是は自力宗の行き方である。

一茶にあつての俳句は、芭蕉のやうに、そんなむづかしいものではない。彼は六歳の時、われと來て遊べよ、親のない雀、と口誦んだ。無造作な、たゞ言はないでゐられないことを言ふのが、彼の死ぬまで俳句を詠ひ續けた心持である。彼にあつて其の俳句は、或時は「悲しき玩具」でもあつたらう、或時は「淋しき盃」でもあつたらう。又俳句は彼の「偽らざる獨言」でもあつた、時には「楽しい唄」でさへもあつた。兎も角、一茶にあつては、一日々々を生きて

おのれがすがた  
にいふ  
ひいき目に見て  
さへ寒きそぶり  
かな

俳諧  
一茶肖像

春前墨信齋



あのをゆ

まじり

ひいき目な

そぶり

かな

ゆく上に、俳句は缺くべからざるものだつた、此の意味で一茶も亦俳句を以て自分を生かしたと謂へるが、俳句を以て自分を向上せしめようなどといふ自力的な事とはまるで違つてゐた。一茶も亦、自分の無藝無才を述べてゐるが、御佛は曉の光に四十九年の非を悟り給ふとかや、あ



闇きより  
性空上人の許に  
詠みて遣はしけ  
る雅致女式部  
暗きより暗き路  
にぞ入りぬべき  
遙かに照せ山の  
はの月(拾遺集)

ら凡夫のおのれ如き、五十九年が間暗きより暗きに迷ひて、遙かに照らす月影さへ頼む程の力なく、たま／＼非を改めんとすれば、暗々然として、盲の書を読み、蹇の踊らんとするに等しく、迷に迷を重ねぬ。げに／＼諺にいふ通り、愚につける薬もあらざれば、なほ行末も愚にして、愚のかはらぬ世を経べきことを願ふのみ。と、自分に具はつた愚は愚のまゝに安住し、ありのまゝをよしとして生きようとする、此の態度は一切を如來の慈悲に任せてたゞ念佛三昧に身を入れる他力宗の行き方である。芭蕉と一茶と、此の二人の素質は白と黒の如く違つてゐる、而して彼等の作り出した藝術も亦、著しく色彩を異にしてゐる。それでゐて二人とも本當の俳人だ、二人とも本當の俳句を作り、俳句に依つて作られた人だと謂つて誤がない。そこが面白い所

だと思ふ。俳句といふものは、元來一つの詩形だ。斯ういふ詩形には斯ういふ内容を盛るべきものと、定まつた譯のある筈はない。芭蕉が詠めば芭蕉の素質によつて生かされ、一茶が吟ずれば一茶の個性が輝く。それでいゝではないか。——強ひて名を附ければ芭蕉のは高踏派、一茶のは民衆派である。又芭蕉は自力宗であり、一茶は他力宗であると謂へよう。此の二人の傾向の差は、從來の俳句の種々相のうちで、最も本質的で、且代表的なものだと私は思ふ。(芭蕉と一茶)

野口米次郎

詩人  
英詩人  
慶應大學教授  
明治八年愛知縣  
津島町生

一三 雨

野口米次郎

今、雨はぱつたりと止む。眼前の庭の水たまりは消える……



ミラー  
米國の詩人

Joaquin Miller  
(1841-1913)

廣重  
歌川廣重  
江戸の浮世繪師  
安政五年(三〇  
年六十二  
芭蕉庵  
深川六間堀の門  
人杉風の別墅

眞白な足を上げた雨の踊り子は何處へやら姿をかくしてしまふ。一筋の大きな太陽の光線はさつと落ちる。白い澤山の蝶がどこやらから飛んで来て、太陽の光線の中で圓を描く。まことに見事な一幅の繪畫だ。

降雨に關する追憶はなか／＼澤山ある。第一に私の頭に浮んで來るのはミラー山莊の雨である。私が廣重であるならば、彼が「唐崎夜雨」で使用したやうな魔法的手段で直線の豪雨を描くであらう。廣重の木版繪は夜雨であるから淡墨の夜曲であるが、私が心の中で追憶的に描く一枚繪は、盛夏の白雨であるから鮮明な進行曲である。畫面の中央にうづくまる巨大な唐崎の松の代りに、私の畫面では、昔深川の芭蕉庵を思はせるやうな山麓の小屋を豪雨がたゞいてゐる。雨はうどんのやうに太い。

アカシヤ  
Acacia



(畫重廣) 雨の會木

この太いうどん雨が無數の平行線を作つて天から落ちる有様は實に壯快である。はしやぎ切つた大地は、大きな口を開いて、天の甘露を一飲み飲んで舌鼓を打つ音があられのやうに響き渡る。まつしぐらに落ちる雨の間をくゞつて左右に飛ぶ蜂雀が三つ四つ二つある。蜂雀は雨にぬれて黒光りする。そこに廣重が見たことのあるまい、また見たならば喜んで繪にかいたであらうと思はれるアカシヤが立つてゐる。アカシヤは房々した青黒



い葉の毛髪を雨にぬらししてゐる。廣重の木曾街道あし田の一枚には波状的にうねる黄色な山に反響する樹木の合唱があつて、極めて音楽的な構圖である。若しこの繪の杉の樹に換へるに雨にぬれるアカシヤを以てしたならば、一層近代的藝術の雰圍氣を出すであらうと想像される。私は單にミラー山莊のアカシヤを紹介するのではない。アカシヤの彼方に廣くひろがる一面の野原は麥畑である。天氣の好い日の正午近くにになると、麥の天邊は劍のやうに輝く。それが豪雨にたゞかれると甘い香氣を放散していふにはれない歡喜を與へる。私が今アカシヤを紹介する理由は、私が夏の雨にぬれる麥の香氣を紹介したい希望に外ならない。

私はこのうどんのやうな平行線の白雨に關してもう一つの場

面を忘れることが出来ない。それは私が十幾年前、日光は神橋近くで見た驟雨の光景である：沛然として斜に落ちる力強い初夏の雨は私の顔を打つた。橋向ふの日光山は灰色に煙つてゐる。帯でも巻いてゐるかのやうに見える黒白い午後二時頃の濃霧は、私に繪にある蓬萊山を思はせた。日光山は手に取る程間近にありながら、千里も遠方に離れてゐるやうに感じた。眼前の樹木の葉から枝から、乳汁の如くとろ／＼した夢が滴ると思つた、千年も萬年も年取つた靈が蜘蛛の巢のやうに引懸つてゐると思つた。日光に雨がなないと、私には日光がない。降雨の恵でどんなに日光の樹木が幻想の如く青光のすることであらう。

「大谷川の向岸に澤山の地藏菩薩がゐた。私はその中でも特に



親地藏といはれた一體を愛した。私は謙讓な態度でそれをスケッチした。居並んだ地藏菩薩の後に恰も蜃氣樓でもあるかのやうに見えたり漂うたりする山は、即ち男體山である。この位詩的な場所は二つとあるまい。私はこれらの地藏菩薩が経験した過去の歴史を、體一面に生えてゐる青い苔や巡禮が貼りつけて行くきたない紙の片から想像することができた。私は一度中禪寺から下つてそこを通過する時、激しい風雨に出遇つた。私同様にそこに居並ぶ地藏菩薩も全身びしょぬれであつた。私は自分の事よりこれらの菩薩の身の上を憐んだ。：：しかし私は空虚な涙の感傷家でない。私は今日に至るも雨に打たれた地藏菩薩を忘れることが出来ない。確かにそれは畫題として良いものゝ一つである。私は日光を思ふと、すぐ眼前

に雨が浮き出して来る、また雨中の地藏菩薩が顯れて来る、：：恐らく今頃も日光では定めし雨が降つてゐるかも知れない。日光は雨の本場だ。日本は世界の何處に比較しても、雨の變化の點で優つて居る。「米國に玉子料理が三百六十五種あるといはれるが、それ以上の變化を日本の雨が示すであらう。」この言葉は私がニューヨークで或有名な米國の美術家から聞いた談話の一節である。彼は一枚の「降雨」を満足に描くことが出来なかつたことを残念に思つてゐる、さうして日本人が雨の畫家として世界無比であるといふことを認めて居る。日本人の一人として、私も雨に對する精緻な感覺を持つてゐることを喜ぶのである。日本人の藝術的價値は、雨の變化に對してどんなに敏感であるかで定まるかも知れない。



Oakland  
 オークランド  
 米國加州の首府  
 ラメダの對岸  
 サンスフランシスコの東海  
 處する東海岸  
 ミラボーは此  
 のダイハモ  
 のといふ丘  
 の上に住ん  
 でのたはる  
 今も保存さ  
 れて居る

私が私の第一詩集を出したのは最早三十年の昔のことである。それは、都會を離れ神様に近い加州オークランドの山莊生活の赤裸々な詩の日記である。そのページを今開けて讀むと、私は雨の詩が多いのに驚く。私は眞夜中寂しい寢床に横たはり、天地の沈黙に釘を打つやうに響く降雨の音を聞きながら、人生を一篇の敘事詩として觀じた。私は杉の木から小屋へ滴る銀鈴の雨に、木地のまゝの人間生活の告白を聞いて、如何に自然と同化するかの祕密を學んだ。詩集の中には、天女の涙として地上の薔薇をぬらす雨の消息がある、雨が晴れて、古代の官女の髪の毛のやうに長い木の葉の枝を拂ふ柳の姿がある。詩集の中に雨に打たれて破れた一枚の葉を地上に横たへる芭蕉の苦痛がある。

「あゝ、私の魂は、雨降る世界の雨降る夜、雨にぬれて糊のはなれた紙提燈のやうだ。」と私は書いて居る。私はその當時、芭蕉野分して盃に雨を聞く夜かなの芭蕉の詩境に立つた。  
 (報知新聞)

### 一四 廬山烟雨

生田 春月

東坡が詩に、

廬山烟雨浙江潮。未到千般愁不消。

到得歸來無別事。廬山烟雨浙江潮。

私はこの一絶が好きだ。旅に行くと、いつでも私はこの詩を思ひ出す。久しく憧憬してゐた山水などに接したとき、その風光が自分の想像を裏切らなかつた場合でも、なほこの感を免れな

生田春月  
 文學者  
 名は清平  
 明治二十五年島  
 取縣米子町生  
 東坡  
 名は軾  
 支那宋代の文學  
 者  
 廬山  
 支那安徽省九江  
 府にある名山  
 浙江  
 支那浙江省にあ  
 る錢塘江







これは人生のあらゆる事に於て、私達の経験するところだが、私達がまた人生の終局點に立つて、その一生をふりかへつて見た時にも、多分、同じく此の「別事無し」の感があるであらう。これが人生なのであらう。人間の一生は、これだけのものに過ぎないのかも知れない。けれども、その別事なきところは、みづからその境地に往かなければわからないのである。それを知るためには、私達は一生を消費しなければならぬのである。丁度、別事無き悟道の境界に達せんがために、禪門の人々が、黙坐三十年を敢へて厭はないやうに。

「到り得、歸り來つて別事無し。廬山は烟雨、浙江は潮。」

(智慧に輝く愛)

一五 借家大將

井原西鶴

井原西鶴  
元祿時代の小説  
作者  
元祿六年(一三三三)  
歿  
年五十二  
室町  
京都市烏丸通の  
西の通  
烏丸通  
今の京都驛の前  
を北に通ずる通  
家質  
家屋を擔保とし  
て金を貸すこと

狀日  
書狀の到着する  
日

室町菱屋長左衛門殿借家に居申され候藤市と申す人慥に千貫目御座候。「廣き世界にならびなき分限我なり。」と自慢申せし。仔細は二間口の棚借にて千貫目持、都の沙汰になりしに、烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利銀積りておのづから流れ、始めて家持となり、是を悔みぬ。今までは借屋に居ての分限といはれしに、向後、家有るからは京の歴々の内藏の塵埃ぞかし。此の藤市利發にして、一代のうち斯く手前富貴になりぬ。第一、人間堅固なるが身を過ぐる本なり。此の男家業の外に反故の帳をくゝり置きて見世をはなれず。一日筆を握り、兩替の手代通れば、錢小判の相場を附置き、米問屋の賣買を聞合せ、生藥屋、呉服屋の若い者に長崎の様子を尋ね、繰綿、鹽、酒は江戸棚の狀日



を見合せ、毎日萬事を記し置けば、紛れし事は爰に尋ね、洛中の重寶になりける。

袖覆輪

袖口

不斷の身持、肌に單襦袢、大布子綿三百目入れてひとつより外に着ることなし。袖覆輪といふこと、此の人取りはじめ、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて、終に大道を走りありきし事なし。一生の内に絹物としては袖の花色一つは海松茶染にせしこと、若い時の無分別と、二十年も是を悔しく思ひぬ。紋所を定めず、丸の内に三つ引又は一寸八分の巴をつけて、土用干にも疊の上には直には置かず、



井原西鶴

海松茶染  
海松のやうな黒みがかった茶色で染めかへしのかかぬ色

鬼縑

麻糸で荒く織つた布

烏邊山

京都の東山にある火葬場

六波羅

烏邊山から西の低地

當藥

せんぶり

苦參  
藥草の名

大佛

京都方廣寺の大佛

麻袴に鬼縑の肩衣、幾年か折目正しく取置かれける。町並に出づる葬禮には、是非なく烏邊山に送りて、人より跡に歸りざまに、六波羅の野道にて丁稚もろとも當藥を引いて、是を陰干にして、腹藥なるぞと、只は通らず躓く處で燧石を拾ひて袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帯持はよろづ斯様に氣を附けずしては有るべからず。此の男、生れついて吝きにあらず。萬事の取廻し人の鏡にもなりぬべき願、かほどの身代まで年とる宿に餅搗かず。忙しき時の人遣ひ、諸道具の取置もやかましきとて、是も利勘にて大佛の前へ逃へ、一貫目に付何程と極めける。十二月二十八日の曙、急ぎ荷なひつれ、藤屋見世に並べ、請取り給へ」といふ。餅は搗きたての好もしく春めきて見えける。且那は聞かぬ顔して、十露盤



東寺

京都の南端九條  
にある眞言宗の

古寺

七十五日

初物を食べば七  
十五日長いき

(談)

柳

正月餅花をつけ  
る枝に用ひる

栂

節分に用ひる

薏苡仁

八朔の贈答に用  
ひる

置きしに、餅屋は時分柄にひまを惜み、幾度か斷りて、才覺らしき  
若い者、秤の目りんと請取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて、今  
の餅屋請取つたか。といへばはや渡して歸りぬ。「此の家に奉公  
する程にもなき者ぞ。温もりのさめぬを請取りし事よ」と、又目  
を懸けしに、思の外に減のたつこと、手代我を折つて、喰ひもせぬ  
餅に口をあきける。

其の年明けて、夏になり、東寺あたりの里人、茄子の初生を目籠に  
入れて賣來るを、七十五日の齡、これ樂みの一つは二文、二つは三  
文に直段を定め、何れか二つ取らぬ仁はなし。藤市は一つを二  
文に買ひていへるは、今一文で、盛なる時は大きなるが有り。と心  
を附くる程のことあしからず。

屋敷の空地に柳、栂、葉桃の木、花菖蒲、薏苡仁など取りまぜて植

多田の銀山

攝津國河邊郡多

田村にある古い

鐵山

伊丹の北二里餘

置きしは、一人ある娘が爲ぞかし。葭垣に自然と朝顔のはひか  
かりしを、同じ眺にははかなき物とて、刀豆に植ゑかへける。  
何より我が子を見る程面白きはなし。娘大人しくなりてやが  
て嫁入屏風を拵へとらせけるに、洛中盡を見たらば、見ぬ處を歩  
きたがるべし。源氏・伊勢物語は心のいたづらになりぬべきも  
のなりと、多田の銀山出盛りし有様書かせける。此の心からは  
いろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、  
ひもせず、京のかしこ娘となしぬ。  
親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず。節句の  
雛遊をやめ、盆に踊らず。毎日髪かしらも自ら梳きて丸鬢に結  
ひて身の取廻し人手にかゝらず。いづれ女の子は遊ばすまじ  
きものなり。



折節は正月七日の夜、近所の男子を藤市方へ長者になるやうの指南を頼むとて遣はしける。座敷に燈輝かせ、娘を付けおき、露地の戸の鳴る時知らせと申し置きしに、此の娘しをらしく畏り、燈心を一筋にして物申の聲する時、元の如くにして勝手に入りける。三人の客座敷に着く時、臺所に播鉢の音響き渡れば、客耳を悦ばせ、是を推して「皮鯨の吸物」といへば、「いや、始めてなれば雑煮なるべし」といふ。又一人はよく考へて「煮麵」と落着きける。必ずいふ事にしてをかし。

藤市出でて三人に世渡の大事を物語して聞かせける。一人申せしは「今日の七草といふいはれはいかなる事ぞ」と尋ねける。

「あれは神代の始末はじめ、増水といふことを知らせ給ふ。」又一人、掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは」と尋ぬ。「あれは朝夕

七草  
芹なづな五行は  
こべら佛の座す  
ず菜すいしろ  
掛鯛  
正月の門松に二

匹の鹽鯛を掛け  
ておくこと

荒神  
三寶荒神  
籠の神

近松門左衛門

江戸前期の戯曲  
作家享保九年(一  
七二四)歿  
年七十二

親子

鄭芝龍鄭成功父  
子

明の泉州府南國  
の人

日本平戸に來て  
名を老一官と改  
め田川氏の女を  
娶り成功即ち和  
藤内を生む成功  
後明帝から朱姓  
を頂いて國姓爺  
と稱す

に肴を食はずに、是を見て食うた心せよと云ふ事なり。」又太箸をとる由來を問ひける。「あれは穢れし時、白げて一膳にて一年中ある様に、是も神代の二柱を表すなり。よく、萬事に氣を付け給へ。偕宵から今まで各話し給へば、最早夜食の出づべき所なり。出さぬが長者になる心なり。最前の播鉢の音は大福帳の上紙に引く糊を搦らした」といはれし。(日本永代藏)

一六 千里が竹

近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども、跡に擁護の神風や、千波萬波を押しきつて、時も違はず親子の船唐土の地につきにけり。鄭芝龍一官は故郷に歸る唐錦、裝束引換へ妻子に向ひ、我



李蹈天

假作の人物  
明朝に仕へて右軍の將となり後韃靼に内應して明帝を殺した遂に國姓爺に捕へて殺された

吳三桂

明朝の忠臣  
仕へて司馬大將軍となる

天啓五年

明の熹宗の時  
(三六五)

娘の子

錦祥女

吳將軍甘輝

明の將軍で韃靼に降つたが又之に叛き鄭芝龍に應じた  
錦祥女の夫

が本國といひながら、時移り、世變り、天下悉く李蹈天が引入れて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友一族とて誰を尋ねん様もなく、司馬將軍吳三桂が生死の様子も知らざれば、何を以て義兵の旗をあげ何處の一城に立て籠るべき處もなし。然るに某去んぬる天啓五年、この國を立退き、日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を乳母の袖に捨置きしが、その子が母はうみ落して當座に死す。かくいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して、今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となりし由、商人の便に聞及ぶ。頼む方はこればかり。親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聳の甘輝も安々と頼まるべし。これより道の程百八十里、連れては人も怪しまん。我一人道をかへ、和藤内は母を

千里が竹

虎は千里の藪にすむ(諺)

潯陽の江

江西省九江

謡曲狸々の場所

白樂天の琵琶行

で名高い

赤壁

湖北省黃州附近

吳王孫權が魏の曹操を破つた處

蘇東坡の賦で有名

獅子が城

假作



近松門左衛門

具し、日本の漁船の吹流されしと頓智を以て人家に憩ひ、追附くべし。これより先は音に聞ゆる千里が竹とて虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江。これ狸々の栖む處。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待揃へ、萬事を示し合すべし。と、方角とてもしら雲の日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。



チャルメラ  
葡萄牙語  
哨呐  
唐人笛  
Charamela

教に任せ、和藤内、人家を求め忍ばんとかひく、しう母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ぎし瀧つ波、飛びこえ跳ねこえ飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうと我をぬかし、のう母ぢや人、この腰骨に覺えたり、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふことか、行けば行く程藪の中。むう、わかつたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ。宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴。と根笹、大竹押分け、踏分け、猶奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲。攻鼓、攻太鼓、喇叭、チャルメラ、高音をそらし、ひようくとこそ聞えけれ。すは、我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、又は狐のなすわざか。と茫然たるその折節、空凄しく風起り、砂を穿ち、どうくく、竹葉さつと卷立て、卷立て、吹折

る竹は劔の如く、凄じなんどもおろかなり。

和藤内ちつとも臆せず、讀めたり、さては異國の虎狩なり。あの鐘、太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が竹。虎嘯けば風起る。猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は孝行の徳に因つて自然と逃れし惡虎の難。その孝行には劣るとも忠義に勇むわが勇力。唐へ渡つて力始め、神力ますく、日本力、刃で向ふは大人氣なし、虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎ。と、尻ひつからげ、身繕ひ、母をかこうて立つたるは、西天の獅子王も畏れつべうぞ見えける。

案に違はず吹く風と共に暴れたる猛虎の態、藤根に面をすりつけすりつけ、岩角に爪磨ぎ立て、二人を目がけいのみ懸るを事もせず、弓手に擲り、馬手に受け、振つて懸れば身をかはし、撓めば

虎嘯けば

虎嘯谷風起、龍興景雲浮、(古樂府)

二十四孝

元の郭居業の撰といふ

大舜や漢の文帝を始め二十四人の孝子

楊香

晉の人

十四歳の時赤手で虎を搏して父の危きを救つた



ひらりと乗移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえい  
えい、虎の怒毛、怒聲、山も崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎  
も半分毛をむしられ、兩方共に息疲れ、石上に突つ立てば、虎も岩  
間に小首を投げ、太息ついたる其の響、輔吹くが如くなり。

母藪陰より走りいで、やあゝゝ和藤内、神國に生れて神より受け  
し身體髮膚、畜類に出であひ力立てして怪我するな。日本の地  
は離るとも、神はわが身にいすゞ川、大神宮の御祓、納受などか無  
からんや。と、肌を守を渡さるれば、げに尤も。と押戴き、虎に差向け  
差上ぐれば、神國神祕のその不思議、猛りに猛る勢も、忽ち尾を伏  
せ耳を垂れ、じりゝゝと四足を縮め恐れわなゝき、岩洞に匿れ  
入る。をづゝを攫んで跳ね返し、打伏せ、打伏せ、ひるむ所を乗つ  
懸り、足下にしつかと踏まへしは、天の斑駒、素戔鳴尊の神力、天照

身體髮膚

・身體髮膚受之  
父母一不敬毀  
傷、孝之始也(孝  
經)

いすゞ川

五十鈴川  
伊勢大神宮のほ  
とりを流れる川  
をづゝ

尾の上の圓くふ  
くれた處

天の斑駒

素戔鳴尊が天の  
斑駒を捕へてそ  
の皮を剝がれた  
故事

らす神の威徳ぞ有難き。

かゝる所に勢子のもの群がり来るその中に、大將と覺しき者大  
音揚げ、やあゝゝうぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。そ  
の虎は忝くも主君右將軍李踏天より韃靼王へ獻上のため狩出  
したるものなるぞ。早々渡せ。異議に及ばゝ打殺さん。じや  
くはん、じやくはん。とぞわめきける。李踏天と聞くよりも願ふ  
所と笑壺に入り、やあ、餓鬼も人數、しをらしい事ほざいたり。身  
が生國は大日本。風來とは舌長し。さほど欲しがらる虎ならば、  
主君と頼む李踏天とやら、石花菜とやら、こゝへつき出し、託言さ  
せい。直に逢うて用もある。さもないうちは、いつかな事なら  
ぬ、ならぬ。とねめつくる。やあ、物ないはせそ。打取れ。と、一度に  
劔をばらりと抜く。心得たり。と護符を虎の首にかけ、母の側に

じやくはん  
意味のない言だ  
らう



ひつすうれば、繋ぎしごとくにはたらかず。「おゝ心易し。」と太刀差翳し、群がる中へ割つて入り、八方無盡に割りたて割りたて撫でまくる。

安大人  
安は捕卒の頭の  
姓  
大人は敬語

勢子の大将安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄し、敵に向ひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛蒐る。「こは叶はじ。」と安大人、勢子の差いたる劔、かり鉾數槍、手にあたるを幸に投附け投附け打ちかゝる。虎は神力自在を得、劔を宙に引つ喰へ、岩に投げあて微塵になす。刃の光玉散る霰、氷を碎くに異ならず。刃物盡くれば、官人ども、色めき立つて逃げまよふ。後より和藤内、「どつこい遣らぬ。」と顯れいで、安大人が素首を擱んでさし上げ、くるくると振りまはし、えいやつと打ちつくれば、岩に

熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにける。

此の勢に官人原、後へ戻れば、惡虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立に突つたちたり。「あゝ、申し御堪忍、御免々々。」と手を合せ、土に喰ひつき泣きゐたり。和藤内虎の背を撫で、「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手練を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍、老一官が悴、九州平戸に生長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮、梅檀皇女に巡り逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。」とつめかくる。「のう、何の否で御座りませう。韃靼王に従ふも、李蹈天に従ふも、命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情頼み奉る。」と地に鼻つけて畏る。

梅檀皇女  
思宗烈皇帝の妹  
平戸に漂着して  
故國の亂を語る



絲鬢 月代を大きくし  
 鬢の髪を細く結  
 んだもの  
 厚鬢 鬢を厚く結んだ  
 髪  
 チヤグチウ 不明  
 東蒲塞 今ハ佛國の  
 Cambodja 保護國  
 呂宋 今ハ佛國の  
 Luzon フィリッピ  
 ン群島の中  
 の大島  
 東京 印度支那の  
 Tongking 東北  
 佛國の保護  
 國  
 占城 佛國の保護  
 Champa 交趾

「お、でかした、でかした。さりながら我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添の小刀外させ、是も當座の早剃刀、母も手に手に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやらこぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬くひまに剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合せて頭ひやつく風引いて、くつさめくつさめ、村雨々々。」と、涙を流すぞ道理なる。  
 親子どつと打笑ひ、揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて何左衛門・何兵衛・太郎次郎十郎まで、面々國所頭字に名乗り二行に立つてぼつたてろ。「承り候」と、お先手の手振の衆、チャグチウ左衛門・東蒲塞右衛門・呂宋兵衛・東京兵衛・暹羅太郎占城次郎・チャルナン四郎・ホルナン五郎・ウンスン六郎・スン吉郎・モウル左衛門・チャ

チヤルナン この以下不明  
 モウル 莫臥爾  
 Mogol インドの國  
 名  
 ジャガ 爪哇  
 Java 爪哇  
 サントメ  
 San Thomas 聖多默  
 インドの南  
 部か  
 佐々醒雪 國文學者  
 東京高等師範學  
 校教授  
 文部省博士  
 京都大學  
 大正六年  
 卒  
 宗因 西山二郎作  
 肥後熊本藩士  
 松永貞徳の門人  
 檀林風の祖  
 天和二年(三三三)  
 卒  
 年七十八

ガ太郎兵衛・サントメ八郎・英吉利兵衛、今參のお供先、あとに引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名を取る、口取る、國を取る。譽は異國本朝に踏跨げたる鞍鐙、虎の背中に打乗つて、威勢を千里に顯せり。  
 (國姓爺合戦)

一七 西鶴と近松

佐々醒雪

井原西鶴は大阪の町人であつたと思はれる。若年から宗因の門に入つて俳諧を學んだが、當初はこれを以て門戸を張るといふ考もなかつたらう。恐らくは藝が身を助くる不仕合と察せられる。師翁宗因の歿したその年の冬に、始めて浮世草子を著して西鶴は談林の點者から新生涯に入つた。



浮世草子

元祿ごろに行はれた當時の社會の有様を寫した小説

談林

口合滑稽などを主とした俳句西山宗因始める

入相のひびき

松の風淋しさも今ぞかし  
ちるや櫻爰らに茶屋があつた物  
西鶴

西鶴の草子は二十餘種。何れも簡短な小話を集めたもので、人間よりは事件或は社會の風俗を巨細に描くといふ方面に力を盡して居る。そして後年の永代藏以下の者に至つては、西鶴の思想が更に變化して稍、老成人の態度がある。勿論かの濶達な

入相のひびき



井原西鶴筆蹟

風は失つてないが、なほ貨殖の道を説いたり、大晦日に狼狽する様を嘲つたり、二日酔の頭痛を笑つたりする所は、流石に五十近い老翁の酸いも甘いも知りぬいた異見といふ風が見える。その文章に至つては何人も企及し難い長所を有つて居る。そ

大矢數  
延寶八年(三三〇)  
の夏西鶴が一日  
に四千句を作つ  
たもの

の簡潔で奇警なことは前後に比類がない。若し國文學史上に強ひて類似を求めらるならば、唯清少納言の枕草子がやゝ似てゐるであらうか。それすら西鶴ほどに警句に富んではゐない。これは勿論西鶴その人の天稟の才でもあるが、又俳諧から得た教養に負ふ所が多いので、西鶴の文は一種の俳文であると思つて差支がないと思ふ。元來談林俳諧は警句を尙ぶものである。その警句を一分間に五句位づゝ連發したものがかの大矢數であつた。彼の文章に警句の多いことは、この教養の結果であらう。加之俳諧といふ小詩形の中に或思想を収めようとする爲には、自ら簡潔な敘法にも習熟すべきである。かくして學び來つた文章であるから、彼の文章には罅隙が多い。句と句との間に文法上の連鎖の不



十分な所が頗る多い。これは全く俳諧の續け方より來たものであらう。要するにその文體も内容と共に俳諧に負ふ所ありとはいへ、斯る創始の大手腕を示したことは極めて驚嘆すべきことである。

近松門左衛門實名は杉森信盛といつて武門の出である。その生國については異説が多いが、長州萩の藩士で、同國深川にうまれ、幼時を肥前唐津に送り、二十歳前後で京都に出たともいはれてゐる。又京都生れといふ説も強ちに否定する事も出来ない。三十四歳の時、始めて竹本義太夫の爲に新淨瑠璃を作つてから、その作曲は百餘種に上り、近松の名は都會に喧傳された。初期の作は皆時代物で、四十八歳の時始めて世話物を作つた。近松は時代物の方に多く苦心したもので、世話物は場當りの舊作が

多かつた。が今日の眼から見れば世話物の方が遙かに價值が多い。

筆蹟

近松門左衛門姓者杉森字者信盛平安堂菓林子之像  
享保九年冬上旬  
入寂名阿禱院穆矣日一具足居士不俟終焉期豫自記春秋七十二歳

近松の作に注意すべきことは、先づ形式からいへば、その文體が

近松門左衛門實名は杉森信盛といつて武門の出である。その生國については異説が多いが、長州萩の藩士で、同國深川にうまれ、幼時を肥前唐津に送り、二十歳前後で京都に出たともいはれてゐる。又京都生れといふ説も強ちに否定する事も出来ない。三十四歳の時、始めて竹本義太夫の爲に新淨瑠璃を作つてから、その作曲は百餘種に上り、近松の名は都會に喧傳された。初期の作は皆時代物で、四十八歳の時始めて世話物を作つた。近松は時代物の方に多く苦心したもので、世話物は場當りの舊作が多かつた。が今日の眼から見れば世話物の方が遙かに價值が多い。

漸く散文を離れて律語的に進んだこと、その

様式が敘事の脈を離れて漸く戲曲的體裁に變じたことである。更にその内容に就いて見れば、新淨瑠璃は在來の荒唐無稽なものよりは幾分か事實らしい脚色になつて、人間らしい人間が描き出されてゐる。是が近松の淨瑠璃の最も著しい長所である。



但しそれは比較的、自然であるといふことであつて、決して全く不自然な脚色がなくなつたといふのではない。ことにその時代物と世話物との間には、その點に關して非常な懸隔がある。時代物に於ては、近松の作にでもやはり至善の人物と極悪人が闘つてゐて、幾多の紛争の後に善人の勝利に歸するのである。その善人の甚だしく苦しめられる時には、往々不自然な超人間の勢力が出現して善人を救ふ。それでも見物が忠臣孝子の苦惱を見るに忍びないで、なし得べくば、自ら舞臺に躍り出でて、これを救ひたいといふほどにならせておいて、而して後神怪不思議な事件を點出して之を救ふのであるから、幼稚な見物はほとと息を吐いて安心する。その自然と不自然とを思ふに違がないといふのが近松の大いに歡迎された所以であらう。

世話物には當代の世相がさながら現れてゐる。蓋し近松は、當時の幼稚な見物人は古の英雄豪傑などといふものは恰も鬼神の如きものと想像してゐるといふことを知つて、超人間的の人物を時代物に描き出したが、世話物中に出づべき人物、即ち見物人が日常交渉してゐる張三李四の輩には、極悪人も至善人も皆境遇によつて支配される憐むべき人物であるといふことを見物もよく認識してゐるから、近松も亦常に執着や過失の多い憐むべきか弱い人間としてこれを描き出した。そこで世話物には人間らしい人物が多いのである。世話物の主人公は、抑へ難い感情に驅られて知らず識らず社會の常軌の外に逸出する、そこで社會の人と戦はねばならぬ。こゝに所謂世間の義理と人情との葛藤が起るのである。



近松の文章は實に巧緻なものである。その綿密な縁語やいひ懸け語の連続は必ずしも驚嘆すべきではなからうが、その道行の文句に敘景と抒情との巧に綯交ぜられてゐる所は確かに天下の逸品である。殊に最も感ずべきは事件の發展に伴ふ文段の推移に巧な事で、主要な人物が登場すると共に、簡単な會話や地の文で、これより以前の頗る複雑な事件の大體が説明される。それより以後は、事件の發展と共に人々の關係や境遇が明白になつて來て、見物人の爲に殊更に説明したやうな所が少しもない。その妙所は一々擧げることにも出來ぬが、殆ど神工といふべきであらう。(近世國文學史)

横井也有

尾張の俳人

明天三年(西曆一

及

年八十二

莊周

昔莊周夢爲胡

蝶、栩栩然胡蝶

也。自喻適志

與、不知周也。

俄然而覺、則蓬

蘧然而也。不

知周之夢爲胡

蝶、與、胡蝶之夢

爲周與。(莊子)

古今の序

花に鳴く鶯水に

住む蛙の聲を聞

けば生きたし生

けるものいづれ

か歌をよまざり

ける(古今集)

古池

古池や蛙飛込む

水の音(芭蕉)

やがて死ぬ

やがて死ぬけし

きは見えず蟬の

聲(芭蕉)

一八 百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、優しきものゝ限なるべし。それも啼く音のあいなければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものには託しけめ。蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものゝこと更にも誇りがたし。蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大 きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものゝ上は翁の一句に盡きたりといふべし。





貧の學者  
晋の車胤

筆蹟

梅の散る  
あたりや  
炭のあき俵  
七十九翁羅隱

螢は類ふべきものなく景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく。五月の闇は唯このものゝ爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕へられて油火の代りにせられたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の

梅の散る

あたりや

炭のあき俵

七十九翁

羅隱

横井也筆蹟

外の不自由なり。俳諧にはその真似すべからず。茅蝸は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて夕べは草に露おく頃ならん。つくくぼふしといふ蟬はつくしこひしともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。

と世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

芋蟲は腹立つものにとへ、毛蟲はむつかしき親父の號とす。背蟲、吝蟲は名のみにして蟲ならず。油蟲といふは蟲にありて憎まれず、人にありて嫌はる。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ賣の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。蟻は明暮に忙しく世の營に隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れてその身の安きことを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて千丈の堤を崩すべからず。

槐安の都

淳于棼醉夢人ニ  
大槐安國。見レ  
王。王曰吾南柯  
郡屈レ卿爲レ守。  
凡二十載。使者  
送出穴。遂寤。  
尋古槐下蟻穴。  
乃槐安國。又一  
穴直上三南枝。即  
南柯郡也。(異聞  
集)



蝻螂

欲<sub>テ</sub>以<sub>ニ</sub>蝻螂<sub>之</sub>  
斧<sub>一</sub>禦<sub>中</sub>陸<sub>車</sub>  
之<sub>陸</sub>(文選)

原・吉原

共に東海道の宿  
沼津の西

狗の齒に噛まるゝ蚤はたまゝにして、猿の手に探らるゝ虱は免るゝこと難かるべし。

蝻螂のやせたるも斧をもたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひあるべし。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人に似たり。

促織<sup>はたかり</sup>・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲のそ

の木にもよらで、いかでかく名をつきたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも、同じ名ありて、松をからし、人にうとまる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕べ始めて

竹林の七賢

嵇康

阮籍

山濤

向秀

劉伶

阮咸

王戎

室鳩巢

名は直清

徳川幕府の儒官

享保十九年(三

十九)歿

年七十七

ほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく残りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やりたく里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。(鶉衣)

一九 月は世々の形見

室 鳩 巢

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて、萩吹く風も身にしむ頃なり。久しく翁がり音づれねば、このほどの老のねざめも覺束なし。いざとぶらはん。とて、ある夕暮に例の人うちつれて來りぬ。「またも參らん。」とて歸らんとするを翁とどめて、「今宵は月もよし、薄酒進め奉らん。しひてとまり給へ。」と



清談の露  
清談玉露繁(杜甫)

いへば翁の心をいかでそむくべき。さあらばとておのゝ座をしめて清談の露やうゝ繁き程に、家人やがて心得て、とりあへずあるじまうけし、肴とりそへて盃出しけり。諸客皆酔うて興に入るとぞ見えし。其の中に一人盃を停めて、

青天有月

唐の李白が「把酒問月」の詩

青天有月來幾時、我今停盃一問之。  
と李白が詩を高らかに打吟じけるを、又二人脇よりつけて人攀明月不可得、月行却與人相隨。

丹闕

天宮の門闕

と歌ふ。又外の人々迭に唱和して、其の次を、  
皎如飛鏡臨丹闕、綠煙滅盡清輝發。

姮娥  
月の女神

但見宵從海上來、寧知曉向雲間沒。  
白兔搗藥秋復春、姮娥孤棲與誰隣。

玉山頽る

嵇叔夜之爲人  
也巖々若孤松  
之獨立、其醉也  
傀俄若玉山之  
將頽(世説)

おほかた

大かたは月をも  
めでじこれぞこ  
のつもれば人の  
老となるもの  
(在原業平)  
月みるにぞ

ながむるに物思  
ふことのなぐさ  
むは月はうき世  
のほかよりや行  
く(大江爲基)

と歌ふ。其の次よりは翁も助言して、

今人不見古時月、今月曾經照古人。

古人今人如流水、共看明月皆如此。

惟願當歌對酒時、月光長照金樽裏。

とうたひをさめたり。其の後數獻に及びて玉山頽るゝばかりに見えけり。

さて翁いふやう、おほかたは月をもめでじ。とはよみたれども、老の心も月みるにぞなぐさみはべる。されどそれにつきて千載無窮の感も起りぬれば、むべ月を人の老となるともいふべかめり。たゞし月を見るにいろゝあり。いま思ひ出しはべり。童子の時、家にて八月十五夜の宴に獨り隅に向ひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが月をつくゝと見て、月は徑幾尺か



あるべき各考へて見たまへ。といふ。また同じやうの人かたへより、あれは物の切口とみゆ。奥へ長さいかほどかあらん。とてたがひに僉議しけるを、きく人々皆舌を喰ひけり。翁もをさな心にをかしかりき。今おもへば、世俗月を賞して光のあかきをほこり、影のきよきにめてて、良夜とてたゞ打寄り物食ひ酒飲みなどして歌ひのゝしるを樂みとするは、かの寸尺を語るに等しかりぬべし。又騷人墨客の月を詠めて、字毎に金玉を雕り、句毎に錦繡を裁するも風雅に聞ゆれど、それもたゞ景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感ある事を知らぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、わが儕古人を慕ひて其の書をよみ其の心を知りつゝ、常に世を隔つる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照して來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して

李白

字は太白  
號は青蓮  
盛唐の詩人  
寶應元年(四三三)  
歿

杜甫

字は子美  
號は少陵  
盛唐の詩人  
大曆五年(四三〇)  
歿

楚辭

楚の屈原らの文  
賦をあつめたも

屈子の

楚の屈原  
名は平  
楚の懷王に信任  
され謫せられて  
退いたが憂國の  
心は變らず遂に  
汨羅に投じて死  
んだ

昔を忍びては、さながら古人の面影も映るやうに覺え、月はものいはねども語るやうにも覺え、忘れては昔の事を問はまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣をすてゝ、一氣に古今を洞觀して、青天有月來幾時。といひ出づるより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも外の詩人の及ぶべき事柄にあらず。昔より李杜とて杜甫が上に稱するもことわりにてこそ侍れ。然れども李白の詩も古今流水の如きを感じるまでにて、後代を待つ心は見えず。翁むかし楚辭をよみて、往者余弗及、來者吾不聞。といふに至りて、屈子が心をおしはかりつゝ、感にたへずなん覺えし。此の二句の意をいふに、屈子一代に知己なきをかなしみて、古人は誠にわが心を得たればあはれ一度あうて語らんと思へど、其の世に及ばねばかなはず、又末の世にさる人ありてこ



そ我と心を同じうすらめと思へど、其の人を聞かねば誰とか知らんとなり。是は屈子に限らず、古今心あるきは、大かた此の恨なきにしもあらず。翁も此の心にして月を見るにや、いとゞ感深く覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、いづれの世にか又わがごとく月に對して今を忍ぶ人もやあらん。月はさこそ其の世をも照すらめ。もしあつらへつけらるゝものならば、月にさは一言をも残さましと思ひ侍り。そのこゝろを月みれば末の代までもしのばれて

見ぬいにしへのいとゞゆかしき。

こゝをもて翁が月に無窮の感ありといへるを諸君考へ見たまへ、いはれなきにはあらず。となんいひける。(駿臺雜誌)

バベルの塔

Tower of Babel  
が天まで届  
てくもの建  
た塔  
ユーフラテ  
ス河の右岸

百田宗治

詩人  
 明治二十六年大  
 阪市生

二〇 バベルの塔

百田宗治

吾々はバベルの塔をつくるのだ、  
 一切の時の力を外にして  
 吾々の力を合せるのだ、  
 この人間的建設をいそぐのだ。  
 それがかの天をつき、神の御座をつらぬくまでは  
 吾々は手を休めない、  
 力を失はない、  
 吾々の生命は盡きず、吾々の足は倒れない。  
 汝々として土を運び、  
 煉瓦を荷なひ、  
 鏝をふるひ、汗みどろになり、



一秒も、一瞬間も休むことなしに行く。

吾々の祖先がそれをなした、

吾々の祖父母が、父母が、兄弟が、

吾々の友人が、吾々の敵が、そして吾々の息子と娘、

吾々の未來を繼承する數知れない子孫が、

おそらく若しそれが竣成しないならば、

吾々のうちの最後の一人まで……

その工事は幾億萬年つゞいてきた、

あらゆる人々が參與した。

一枚の煉瓦を運ぶのに生涯を費したものもある。

一掬ひの土きり荷はなかつたものもあらう。

しかしそれに關係しなかつたものは一人もない。

幾度かそれは壊された、

暴風雨がそれをした、地震がそれをした、

神さへも時にそれを妨害した。

しかしそれはまた始められる、

また最初の一個の石が運ばれる、

一握りの砂が持つて來られる、

初は一人が、それから三人が、それから五人が、

それから十人が、……

より丈夫な、より鞏固な基礎がつくられる、

より新しい力を以て、

より深い信念を以て、



そしてより固い、より強い意志と覺悟を以て、

一切の國民、一切の種族がそれに従ふ。

一切の國境を外にして、

一切の侵略と防禦を外にして、

一切の争闘と勝敗を外にして、

彼等のうちに残忍な戦争のつゞく時も、

はげしい憎惡に燃合ふ時も、

この地上に生れ出た瞬間から彼等はこの工事に従ふ。

一人々々の長い生涯、さまざまの生活、

あゝ彼等罪人の罪を犯す時も……

その手は休められない、

皆が全身を汗にひたし、

ながい道を歩み、

相互に扶け合ひ、力づけ、

抱き合つて働く、

彼等は彼等の塔をつくる、

バベルの塔を、

天をつらぬく人間の塔を。

血と肉の塗込められた塔を、

無數の精靈の參與した工事を、

あゝ吾々の涙と汗がそれを固める、

それを竣成に行く。



あらゆる吾々の歡喜、吾々の叫、  
戰、呪詛、悲嘆、勃興、また滅亡の歴史、  
あゝ一切のものがそこに封じられ、  
一切のものがそこに記念されてゐる。  
あゝいつかは完成せられる塔、  
いつかは無數の犠牲とはかり知れぬ時間の中から、  
吾々の塔は天空高く聳えるだらう。  
いつかな暴風に犯されず、  
洪水にも流されず、  
よし神の災虐の力がいかに鋭くとも、  
吾々の力がそれら一切に双向ひ、  
それら一切に壓せられず、

それらの外に高く聳え、  
天空と地上の上に永遠の旗を翻すまでは、  
おゝその時を見るまでは、  
くらやみの中で吾々の作業、  
その數乏しい炬火を失ふな、  
それを消すな、それを振りかざせ、  
皆で運んで、皆で築け、  
一枚の煉瓦、一握りの土、  
老人も、女も、子供も、病める者も、痴愚も、  
地上一切の高峰、一切の壓制、一切の不正  
一切の紛糾を貫いて、  
なほ高く、なほ高く……。

(日本現代名詩集)



阿部次郎

哲學者

東北帝國大學教

授

文學博士

明治十六年山形

縣生

## 二 謙遜の心

阿部次郎

大なるものを孕む心は眞正に謙遜を知る心である。

謙遜とは無力なる者の自己縮小感ではない。無意識の奥に底力を持たぬ者が、自己の懶惰を正當とする申譯ではない。謙遜とは此の如きものであるならば、人生の道に沈潜せんとする者は決して謙遜であつてはいけない。

謙遜とは奸譎なる者がその處世を平滑にする爲の術策ではない。他人の前に猫を被つて、私はつまらない者でございますと御辭儀をして廻る者は、盲千人の世の中に在つては定めて得をする事であらう。併し此の類の謙遜は内省に基づかずして打

算に基づいてゐる。誠實に基づかずして詐欺に基づいてゐる。謙遜とは自己の長所に對する公正なる自認を塗りかくして、周圍の有象無象に媚びることによつて釣錢をとることならば、奸詐を憎み高貴を愛する者は決して謙遜であつてはいけない。謙遜とは人格の彈性を抑壓する桎梏ではない。謙遜とは月並の基督教が罪の意識を強ひる様に、吾等の良心に對する税金として課せられるものならば、精神の高揚と自發とを重んずる者は決して謙遜であつてはいけない。吾等の人格の獨立は、此の如き謙遜を反撥することによつて漸く始るのである。眞正に輕蔑し反撥することを知る魂のみが、無邪氣に公正に自己を主張するの彈力ある魂のみが、眞正の謙遜を知る。謙遜とは獨立せる人格が自己の缺點を自認することである。掩ひか



くす所なく、粉飾する所なく、男らしき公正を以て自己の足らざるを足らずとすることである。此の意味の謙遜を除いて真正に人間に價する謙遜はある筈がない。

吾等の自ら認めて長所とする所が、總べて矮小にして無意味なるを悟るときに、吾等の自ら恃みとする所が相踵いで崩落することを覚える時に、吾等は始めて絶対者の前に頭を擡げることが出来ない程の謙遜を感じるであらう。偉なる者の認識が始る時に、凡ての人は悉く從來の生活の空虚を感じなければならぬ。小なる世界の崩落を経験し、大なる世界の創始を感じ始める者は、必ず謙虚な心を以て絶対の前に跪く筈である。真正なる謙遜を知らざる者は、大なる世界の曙を知らざる者である。私は此の事を特に私自身に向つて言ふ。私は究竟の意味に於

て未だ謙遜のこゝろを知らない。さうして私は真正に碎かれざる心の苦楚の故に黯然としてゐる。私の極小なる世界は一二の稍大なる世界を孕んだ。さうして私は一二の小なる謙遜のこゝろを味はつた。併し大なる謙遜のこゝろの前に、私の小我は猶愚かなる跳梁を恣にしてゐることを感ずる。さうして私は先づ「大なる謙遜のこゝろ」の前に、知らざる神に跪くが如くに跪いてゐる。

謙遜のこゝろは孕むより産むに至るまでの母體の懊惱のこゝろである。

(三太郎の日記)

安倍能成  
哲學者  
明治十六年愛媛  
縣松山市生

三三 否定と肯定と

安倍能成



Democratic

デモクラチック

人間を自然の一片として見る自然主義的の考方は、その見地からして一切の人間を平等視した。即ち人間を物質に、動物に、器械に、引下げることによつて之を平等にした。それによつて一つのデモクラチックな見方を造り上げた。併しそれによつて人間は果して平等の利福を享受しないまでも、一切の人間の平等といふ意識の下に、一種のくつろぎを得たであらうか。それは決してさうでない。この考方は性質の差別を撤することによつて、一種の平等觀を得たけれども、一層手近な辨別し易い量的の差別は、こゝに専ら多くの人の價值判斷の標準となつた。ここに於てか精神的、内面的の價值を好い加減なものとして輕蔑したがる者も、眼の前に歴然たる物質的差別の餘りに殺風景な、餘りに現實的な情態には目を見張らざるを得なかつた。かく

Democracy

デモクラシー

て一方に一切の貴きものをも卑しきものとし、高いものをも低く引下げ、偉大なものをも矮小にしてしまはねば止まない卑俗なデモクラシーが出現すると共に、他方には極めて殺風景な凄じい力の福音が説かれた。富者と權者とは勝誇つて笑ひ、貧者と弱者とは打破られて泣いた。こゝに又宗教的意味を有するデモクラシーがある。それは一切の人間は神に於て、神の子たる點に於て平等だといふ思想である。即ち一切萬物の中に神を認める汎神論的の考方から來たデモクラシーである。自然主義的の考方が人間を自然に引下げての平等を主張するならば、汎神論的の考方は人間を神の子に引上げての平等を主張するといつてよからう。併しこの種の考方の中には、又一切の人間が神の偉大に比べて無價値だ



Aristocracy

| ア  
リ  
ス  
ト  
ク  
ラ  
シ

といふ側から見て、消極的に人間の平等を主張するものも随分ある。併しながらこれは多くの場合に於て、神の子としての平等の半面を示すものとして観察してよからうと思ふ。神の前に平等な無価値は、即ち神の子たる価値を唯一無上の価値たらしめる所以である。それ以外の一切の価値を否定して、神の子たる価値のみを強く肯定せんとするものである。少なくとも私自身は、宗教的要求を迷妄として抛擲し得ざる者である。そして私は宗教的境地が、どうしても汎神論的のデモクラシーに至るべきものであると考へる。この境地に至つて世間的の差別、人間的のアリстокラシーはどうしても否定せらるべきものであると考へる。この境地に至るが爲には、山上の垂訓に於けるが如き価値の轉換のあるべきことを思はずには居られない。

我々は富者の富を誇れるを見る時、富貴の価値を否定してやりたくなる。權力者の權力に傲れるを見る時、權力を否定してやりたくなる。學者が學問を自負して居るのを見ては、學問の価値を否定してやりたくなる。我々是否、私は他人が自分の所有しない物を有する時、その物の価値を否定し、その物の限界を認めることによつて、自分の所有することなき寂しさを慰めたことが無いとは言ひ得ない。それによつて自己の才分の稀薄と自己の怠慢とに、姑息な安心を興へたことがないとは言ひ得ない。併しながら若し神の子の平等が、かくの如く拱手して他人の価値を否定することによつて安々と得られるならば、世に苦しい努力をする者ほど馬鹿はない。神の子の平等は、怠慢者の



福音である。私は少なくともかゝる福音の信徒ではないといふに憚る所はない。

富を有しないことが価値ではない。權力を有しないことが価値ではない。學問の無いことが価値ではない。富、權力、學問は唯それ以上の価値の前に、顔を赧くすべきのみである。貧しきもの、心の空しきもの、其の他は、單に貧しきが故に、心の空しきが故に、福なのではなかつた。唯天國に往き得る條件となることを豫想してのみ福なのであつた。

上のことは何を示すか。それは單なる否定の無価値を示すのである。肯定に導かざる、又肯定によらざる否定の無価値を示すのである。而も更に進んで肯定を後に控へぬ否定は無意味である、無力である、そして實に否定でさへもあり得ないのであ

貧しきものは  
心の貧しきものは  
福なるかな、  
天國はその人の  
有なればなり  
(馬太傳)

る。單に富を否定することによつて、富は實際に於て否定せられない。權力を否定することによつて、權力は否定せられない。唯この否定の背後に、その否定を押し進める肯定のあるによつて、否定はよく否定の働をすらし得たのである。力强き否定は、常にその背後に意識的にか無意識的にか肯定を潜めて居た。昔からの眞摯な思想家は、大抵終局に於て肯定的ではなかつたか。彼は否定のみに生き得る厚顔を押し進め得る人ではなかつた。

歩かうとする者は、一足を前に出す時他の足を後に突つばる。肯定は前に出された足である、否定は後に突つばられた足である。一足を後に突つばらずして前進はない、一足を前へ踏出さずしては後の足を突つばることも出来ない。若し兩足を同時



に前へ出さうとするか又は兩足を同時に後に引かうとすれば人は倒れるのみである。肯定と否定との關係はちやうどこれに似て居る。肯定のみがあり得ない、否定のみもあり得ない。少なくとも人が神であり得ない限に於て、少なくとも人が立つて進まうとする限に於て。

懺悔は徒らになすべきものではなかつた。前足を出さうとして、後足を突つばらねばならぬ時にのみなすべきものであつた。新しく歩み出さうとする者の懺悔にして始めて力強いものである。否已むを得ざるに出たものであつた、必然的なものであつた。新しく歩み出す必要を感じないでする懺悔は懺悔ではない、愚痴である、よまひごとである。自他に益がない。昔から偉大な懺悔告白的の文字は、皆その人の生活の轉機に於てなされ

なかつたのではない。純然たる自然主義の立場にあつては、人は懺悔するに堪へない者である。

否定のない肯定は進歩のない肯定である。自慢自足の生活である。限られた生活である。富に満足せる者、力に傲る者、學問を負へる者、才分に高ぶる者の肯定の中に何等の否定の含まれない時、その状態は、少なくとも彼等の意識に於ては完全自足なものである。行き盡せるだけを行き盡したと思つて居るのである。彼の生活の前進は止つてゐる、少なくとも限られてゐる。樂易な肯定は呪ふべきものであつた。

併しながら、それは否定を以て弱き者、怠惰なる者の特權とすることの反對である。否定するには行き盡すべきだけを行、かねばならぬ、肯定すべきだけを肯定し切らねばならなかつた。眞



パウロ  
Paulo  
十二使徒の  
初人は基督を  
しひどく迫害  
した

の否定は、全力を盡すものにして始めてなし得るのであつた。パウロは全力を盡して基督教徒を迫害した。その結果がこの迫害の否定となつた。それはやがて基督教の肯定であつた。全力的に生き得ざる者、生きんとせざる者には、否定も肯定もあり得なかつた。徒に彷徨することは與へられたる彼等の終生の運命であつた。

神の子の自覺の前に一切を否定することは、恐らくは宗教的デモクラシーに達する唯一の道である。併しながら神の子の肯定がなければ、一切の否定は眞に否定たるを得ない。神の子たる平等は、徒らに己の欲して得ざるものを否定することによつて得られない。より高き價値を握らんと欲する者の、纔かに庶幾し得るところであらう。絶對の價値の前に自己を價値あり

とする心、自己を肯定する心を否定したる者が、即ち「くだけたる心」であらう。これ一切にまさる唯一つのもを肯定せんとして、一切を否定せんとする心であらう。小さな我に於ける一切を否定して、なくてはならぬ唯一のものを求めようとする心であらう。若しかくの如くにして一切の人間に於ける神の子を肯定し、それ以外の一切を否定し得るならば、ベストを肯定してベターを否定し得るならば、これ恐らくは眞のデモクラシーである。而も貴きデモクラシーである。これは私の心の遙かな理想として想望し得るものである。この心持に觸れ得る瞬間は私にとつて恵まれたる瞬間である。(山中雜記)



大正十四年十月二十七日 印刷  
 大正十五年三月三十日 訂正再版印刷  
 大正十五年三月十三日 訂正再版發行



編者 吉田彌平  
 東京市小石川區高田老松町五十二番地

發行者 上原才一郎  
 東京市神田區通神保町六番地

發行所 光風館書店  
 東京市神田區通神保町六番地  
 (電話) 神田三〇八七番  
 (振替口座) 東京三二七番

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
金四十三	金四十三	金四十三	金四十三	金四十三	金四十三	金四十三	金四十三	金四十三	金四十三
金三十九	金三十九	金三十九	金三十九	金三十九	金三十九	金三十九	金三十九	金三十九	金三十九
金三十八	金三十八	金三十八	金三十八	金三十八	金三十八	金三十八	金三十八	金三十八	金三十八
金三十七	金三十七	金三十七	金三十七	金三十七	金三十七	金三十七	金三十七	金三十七	金三十七
金三十五	金三十五	金三十五	金三十五	金三十五	金三十五	金三十五	金三十五	金三十五	金三十五
金三十一	金三十一	金三十一	金三十一	金三十一	金三十一	金三十一	金三十一	金三十一	金三十一
金二十七	金二十七	金二十七	金二十七	金二十七	金二十七	金二十七	金二十七	金二十七	金二十七
金二十一	金二十一	金二十一	金二十一	金二十一	金二十一	金二十一	金二十一	金二十一	金二十一
金十七	金十七	金十七	金十七	金十七	金十七	金十七	金十七	金十七	金十七
金十三	金十三	金十三	金十三	金十三	金十三	金十三	金十三	金十三	金十三
金九	金九	金九	金九	金九	金九	金九	金九	金九	金九
金五	金五	金五	金五	金五	金五	金五	金五	金五	金五
金一	金一	金一	金一	金一	金一	金一	金一	金一	金一

師範國文第一冊用卷七

師範國文第一冊用卷七終







5 1732





広島大学図書

2000302257



6  
57